

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第50集

# 吉田城址(Ⅲ)

1999年3月

豊橋市教育委員会  
豊橋遺跡調査会



豊橋市埋蔵文化財調査報告書第50集

吉<sup>よし</sup>田<sup>だ</sup>城<sup>じょう</sup>址<sup>し</sup> (Ⅲ)

1999年3月

豊橋市教育委員会  
豊橋遺跡調査会



## 例 言

1. 本書は、豊橋市今橋町1番地において豊橋公園便所改築工事に伴い事前に実施された吉田城址16次埋蔵文化財発掘調査及び、豊橋市今橋町3番地-1の一部において豊橋球場便所改築工事に伴い事前に実施された吉田城址17次埋蔵文化財発掘調査の報告書である。調査期間・調査面積については次のとおりである。

地区名	調査期間	調査面積
16次調査区	平成10年10月21日～同年11月5日	50㎡
17次調査区	平成10年11月4日～同年11月24日	50㎡

2. 発掘調査は、豊橋市から委託を受けた豊橋遺跡調査会が行い、小林久彦（豊橋市教育委員会生涯学習部文化振興課文化財係）が調査の指導に当たった。
3. 発掘作業及び整理作業については、地元の方々のご協力を得た。また、報告書作成にあたり、遺構・遺物の実測・トレース等については井上佳子・山本絢子・川西智子らの援助を受けた。写真撮影については、小林が行った。
4. 本書の執筆に際し、吉田城に関しては後藤清司・高橋洋充（豊橋市美術博物館）両氏に、それぞれ教示を頂いた。記して感謝の意を表す次第である。
5. 本書の執筆・編集は小林が行った。
6. 調査区の座標は、建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、これを示した。本書に使用した方位は、この座標に沿うものである。遺構・遺物のスケールについてはそれぞれに明示した。写真の縮尺は任意である。
7. 本調査にあたって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録や出土遺物は、豊橋市教育委員会において保管・管理している。



# 本文目次

## 第1章 遺跡の立地と歴史的環境

- 1. 遺跡の立地 ..... 1
- 2. 歴史的環境 ..... 2

## 第2章 調査の経過

- 1. 調査に至る経過 ..... 5
- 2. 調査の経過と方法 ..... 6

## 第3章 16次調査

- 1. 遺構 ..... 7
- 2. 遺物 ..... 12

## 第4章 17次調査

- 1. 遺構 ..... 18
- 2. 遺物 ..... 24

## 第5章 まとめ

- 1. 16次調査区の様相 ..... 34
- 2. 17次調査区の様相 ..... 34

- 報告書抄録 ..... 36

## 挿 図 目 次

第1図	吉田城址周辺地形図 (1/40,000) .....	1
第2図	吉田城址周辺の遺跡分布図 (1/25,000) .....	3
第3図	江戸時代の吉田城の構造 (1/10,000) .....	4
第4図	調査区位置図 (1/2,500) .....	5
第5図	16次調査区全体図 (1/50) .....	9
第6図	16次調査区遺物出土状況図 (1/20) .....	10
第7図	16次調査区遺構実測図 (1/40) .....	10
第8図	歩兵第十八聯隊兵舎等配置図 (1/25,000) .....	11
第9図	16次調査区出土遺物実測図-1 (1/3・1/4) .....	13
第10図	16次調査区出土遺物実測図-2 (1/3・1/4) .....	15
第11図	17次調査区全体図 (1/50) .....	19
第12図	17次調査区遺構実測図-1 (1/50・1/40) .....	21
第13図	17次調査区遺構実測図-2 (1/40) .....	23
第14図	17次調査区出土遺物実測図-1 (1/3) .....	26
第15図	17次調査区出土遺物実測図-2 (1/3) .....	29

## 表 目 次

第1表	16次調査区出土遺物観察表 .....	17
第2表	17次調査区出土遺物観察表 .....	32

## 写真図版目次

### 16次調査

図版1-1	調査区全景-上面- (北東から)	2	調査区全景-上面- (南西から)
2-1	調査区全景-下面- (南西から)	2	調査区全景-下面- (北西から)
3-1	SD-1~SD-3全景 (西から)	2	SD-3断面 (西から)
4-1	SD-3遺物出土状況 (北から)	2	SD-2遺物出土状況 (北から)
3	SD-2断面 (南東から)		
5-1	SK-2他全景 (北西から)	2	調査区南壁断面 (北東から)
6-1	作業風景 (南東から)	2	出土遺物-1
7	出土遺物-2		



17次調査

図版 8-1	調査区全景-1 (西から)	2	調査区全景-2 (西から)
9-1	SB-1 全景 (北から)	2	SB-1 全景 (西から)
10-1	SB-1・P5断面 (南から)	2	SB-1・P5完掘状況 (東から)
3	SB-1・P8断面 (南から)	4	SB-1・P6完掘状況 (東から)
5	SD-1 全景 (北から)		
11-1	SD-1 断面 (東から)	2	SK-1 全景 (西から)
3	SK-14 全景 (東から)		
12-1	作業風景 (南から)	2	出土遺物-1
13	出土遺物-2		

# 第1章 遺跡の立地と歴史的環境

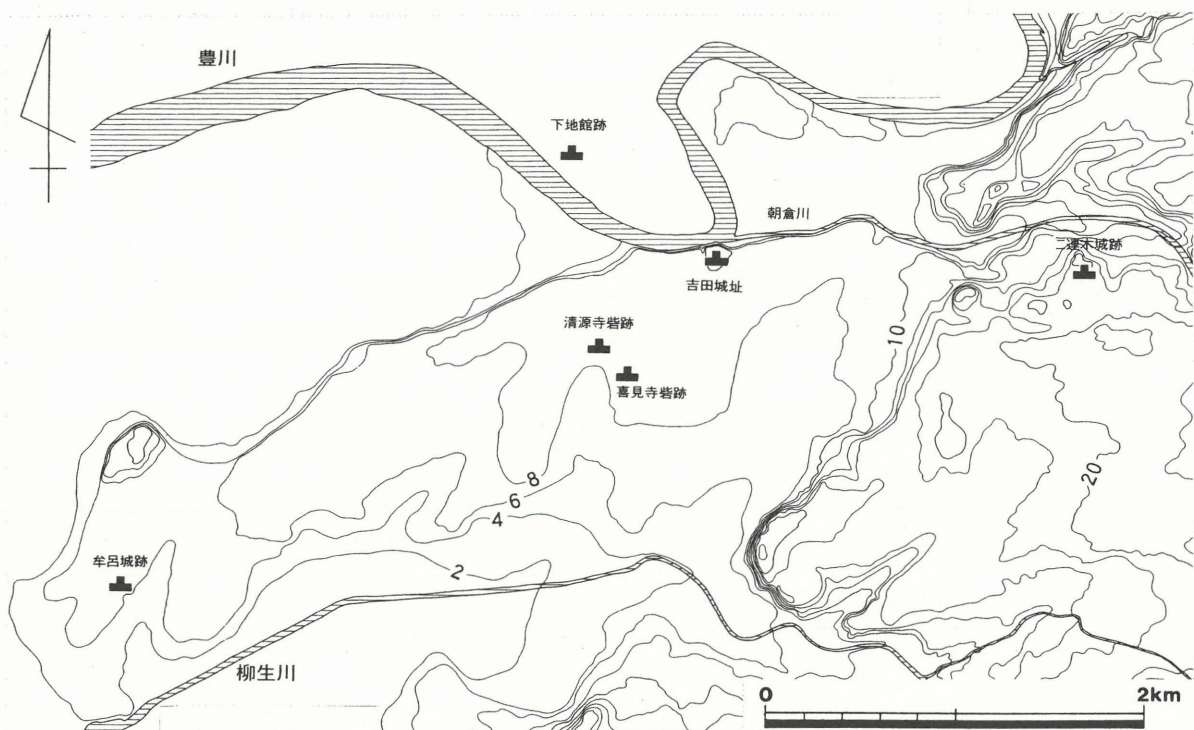
## 1. 遺跡の立地 (第1図)

吉田城址は、豊橋市今橋町他に所在し、城館以外に縄文時代晩期から近世・近代の遺構・遺物が確認されている複合遺跡である。

豊橋市域は、東を弓張山地、南を太平洋、西を三河湾、北を豊川によってそれぞれ限られている。東部の山地や北西部の沖積低地を除くと、市域の多くは豊川と旧天竜川によって形成された河岸段丘上にある。この河岸段丘は、大きくは高位面（天伯原面・標高30～60m）、中位面（高師原面～豊橋上位面・標高15～30m）、低位面（豊橋面・標高4～10m）の3面に分けることができる。

吉田城址の立地する河岸段丘・低位面は、他の段丘面に比べて形成年代が新しいため侵食は進んでおらず比較的平坦となるが、その面の連続性からさらにⅠ～Ⅲ面に分けられる。Ⅰ面は、この吉田城址及び牟呂町坂津付近にあり、周囲より1～2m程高い小山状となる。Ⅱ面は標高4～8mで低位面の主要部をなし、Ⅲ面については柳生川に沿って緩く傾く標高3～5mの部分である。

吉田城址は、そうした周囲よりもわずかに高い標高10m前後の河岸段丘・低位面Ⅰ～Ⅱ面にあり、平城の選地を考えた場合、城下や交通路をはじめとして周囲を広く見渡すことのできる場所に在ると言える。またすぐ北側は、豊川・朝倉川に侵食された比高7～8mの段丘崖となり、城背面が自然の防御として利用されている。また城館以外でも、洪水等に関する災害・水利・交通などを考慮すれば、この場所は集落等を形成する上で最良の地であると言えよう。



第1図 吉田城址周辺地形図 (1/40,000)



## 2. 歴史的環境 (第2・3図)

吉田城址が立地する河岸段丘・低位面やその北側に広がる沖積低地には、縄文時代から近世にかけての遺跡が多く分布している。ここでは、吉田城址を中心に周辺の遺跡の概要について時代別に述べ、また吉田城の概要について記すことにする。

### A. 周辺の遺跡

縄文時代では、石塚貝塚(14)や五貫森貝塚(2)、大蚊里貝塚(3)などがある。石塚貝塚は、ハイガイを主体とする前期の貝塚であり、五貫森貝塚や大蚊里貝塚はヤマトシジミを主体とした晩期の貝塚である。その他、眼鏡下池北遺跡(20)・洗嶋遺跡(25)・おいほて遺跡(27)等で早期や中期の土器が出土している。

弥生時代では、浪ノ上遺跡や西側遺跡、塩田遺跡(8)、緑遺跡(13)、熊野遺跡(19)、東田遺跡(32)などがある。このうち西側遺跡は、中期から後期の貝塚や竪穴住居と考えられる遺構が確認され、比較的大きな集落と推測される。また、飽海遺跡(17)も後期の遺跡と言われている。

古墳時代では、東田古墳(29)やごんぞうぼう古墳(6)、稲荷山古墳群(18)等の古墳がある。東田古墳は、中期の前方後円墳で全長40mを測り、後円部から鳥文鏡・大刀が、墳丘からは円筒・形象埴輪が出土している。ごんぞうぼう古墳については、前方後円墳と言われているが詳細ははっきりしない。稲荷山古墳群については、方墳を主体とした初期群集墳と考えられる。また集落では、熊野遺跡で前期の竪穴住居が、東田遺跡(32)では後期の竪穴住居がそれぞれ検出されている。なお、これまでの吉田城址の調査では、銅鏃・円筒埴輪等の遺物が出土したり、後期の竪穴住居が検出されており、周囲に古墳や集落の存在が予想される。

奈良・平安時代では、吉田城址の過去の調査で当該期の遺物が広範囲で出土している。この付近は、伊勢神宮領の飽海神戸・吉田御園があったとされ、また今回の17次調査区では官衙的な遺構が検出されている。これ以外では、眼鏡下池北遺跡や東側遺跡(23)等で、わずかに遺物が出土している。

鎌倉・室町時代では、熊野遺跡、東側遺跡、西側遺跡などで小規模な集落跡が見つかっている。なお沖積低地に立地する宮井戸遺跡(4)、袋小路遺跡(5)、下河原遺跡(7)、善蔵遺跡(9)、為河原郷遺跡(10)、北川原遺跡(11)などは、灰袖系陶器や土師器の散布地とされるが、詳細ははっきりしない。

戦国時代では、戸田氏の築いた二連木城址(31)、松平家康が吉田城攻めの際に築いたとされる喜見寺砦址(16)、清源寺砦址(15)などがある。このうち二連木城は、段丘の縁辺にあり、主郭付近には土塁・堀などが比較的残っている。

江戸時代には、吉田城址以外では、小規模な集落と考えられる中郷遺跡(21)、中郷西遺跡(22)などが見られる。東海道の宿場町としては、吉田宿が置かれ、また19世紀には牛川窯(26)が小規模ながら操業している。

明治時代以降には、吉田城内に旧日本陸軍歩兵第十八聯隊が設置されている。



## B. 吉田城の歴史と構造

吉田城は、永正2（1502）年に牧野古白によって築かれ、当初は今橋城と称していた。この地は、牧野・戸田両勢力の中間にあり、16世紀前葉にはしばしば両者による争奪戦が繰り返され、またその後は松平氏や今川氏の領有下となる。松平家康が三河を統一し、重臣酒井忠次が吉田城に入ってから城主が比較的安定した。文献上に記述はないが、吉田城址9次調査では16世紀中葉に掘削されたと考えられる堀が2条検出されており、この時期の城域拡張が推測される。



- |         |            |           |            |
|---------|------------|-----------|------------|
| 1 吉田城址  | 2 五貫森貝塚    | 3 大蚊里貝塚   | 4 宮井戸遺跡    |
| 5 袋小路遺跡 | 6 ごんぞうぼう古墳 | 7 下河原遺跡   | 8 塩田遺跡     |
| 9 善蔵遺跡  | 10 為河原郷遺跡  | 11 北川原遺跡  | 12 下地館址    |
| 13 緑遺跡  | 14 石塚貝塚    | 15 清源寺砦址  | 16 喜見寺砦址   |
| 17 飽海遺跡 | 18 稲荷山古墳群  | 19 熊野遺跡   | 20 眼鏡下池北遺跡 |
| 21 中郷遺跡 | 22 中郷西遺跡   | 23 東側遺跡   | 24 西側遺跡    |
| 25 洗嶋遺跡 | 26 牛川寮     | 27 おいほて遺跡 | 28 南牛川A遺跡  |
| 29 東田古墳 | 30 東郷遺跡    | 31 二連木城址  | 32 東田遺跡    |

第2図 吉田城址周辺の遺跡分布図（1/25,000）



家康の関東移封後は、池田照政（輝政）が城主となり、城域の拡張・整備、城下町の整備などを進めた。照政の整備により城域は東西1,400m、南北600m、面積840,000㎡に及んだが、工事未完成のまま姫路に転封している。その後は、小禄の城主が多く、城の維持に苦慮したと言われ、大規模な改修はそれほど行われていない。明治維新後建物は取り壊され、堀も一部埋められている。跡地には歩兵第十八聯隊が置かれ、堀や土塁がこの時にも改修されている。戦後には更に堀が埋められるなどして、現在の姿に至っている。

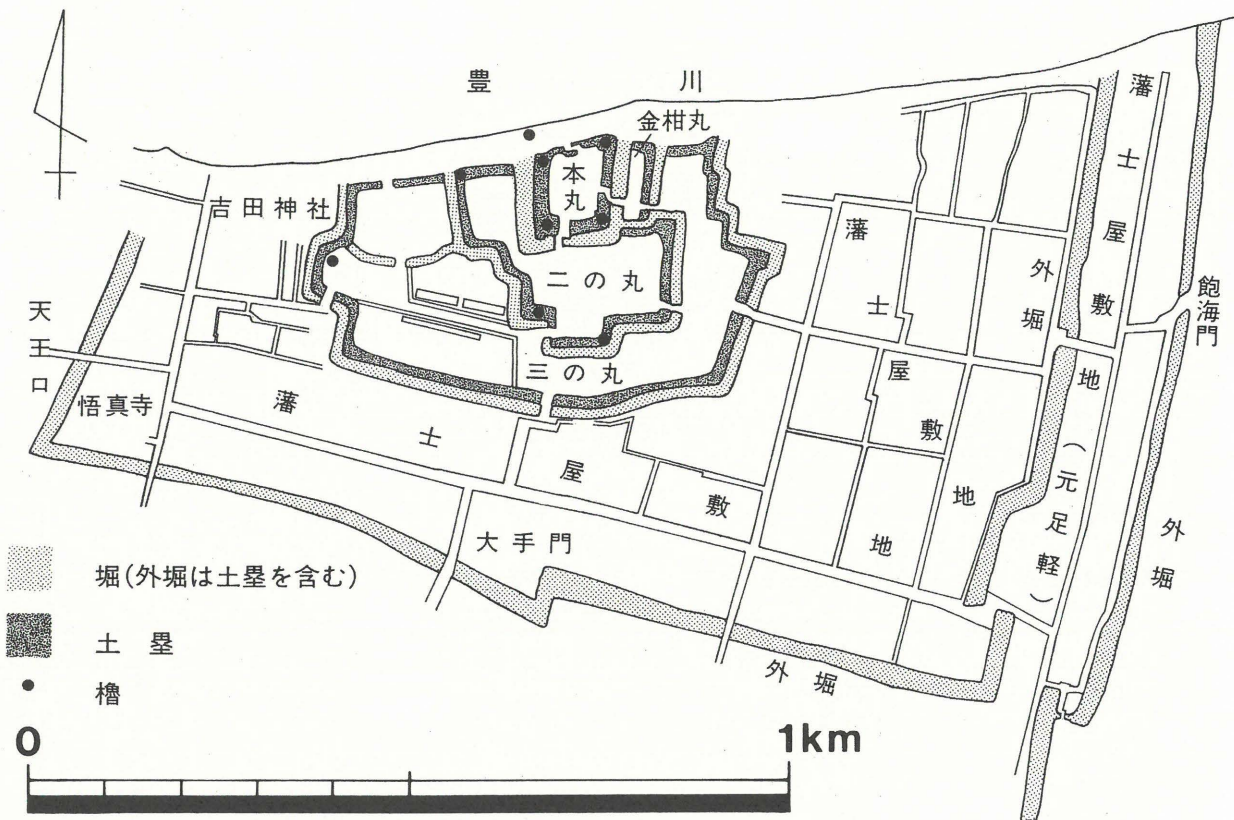
江戸時代における吉田城の構造は、現存する絵図や地籍図等から復元され、照政の時代のものをほぼ踏襲していると言われているが、戦国時代の構造については記録が乏しく断片的でしかない。江戸時代の構造では、背後の豊川を自然の要害とし、本丸を中心にして、二の丸、三の丸、藩士屋敷が取り囲む「半輪郭式」の構造をとる。また、本丸の北側には腰曲輪を置き、背後の攻撃に備えている。本丸は、東西約60m、南北約70mの規模で、内側を石垣で囲んでいる。なお、本丸の東側には金柑丸と呼ばれる曲輪があるが、中途半端な構造でその用途ははっきりしない。

石垣については、本丸周辺、門、水門、二の丸の堀の一部などに築かれたにすぎない。

#### 参考文献

豊橋市教育委員会他『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第21集 吉田城址（Ⅰ）』1994

豊橋市教育委員会他『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第24集 吉田城址（Ⅱ）』1995



第3図 江戸時代の吉田城の構造（1/10,000）

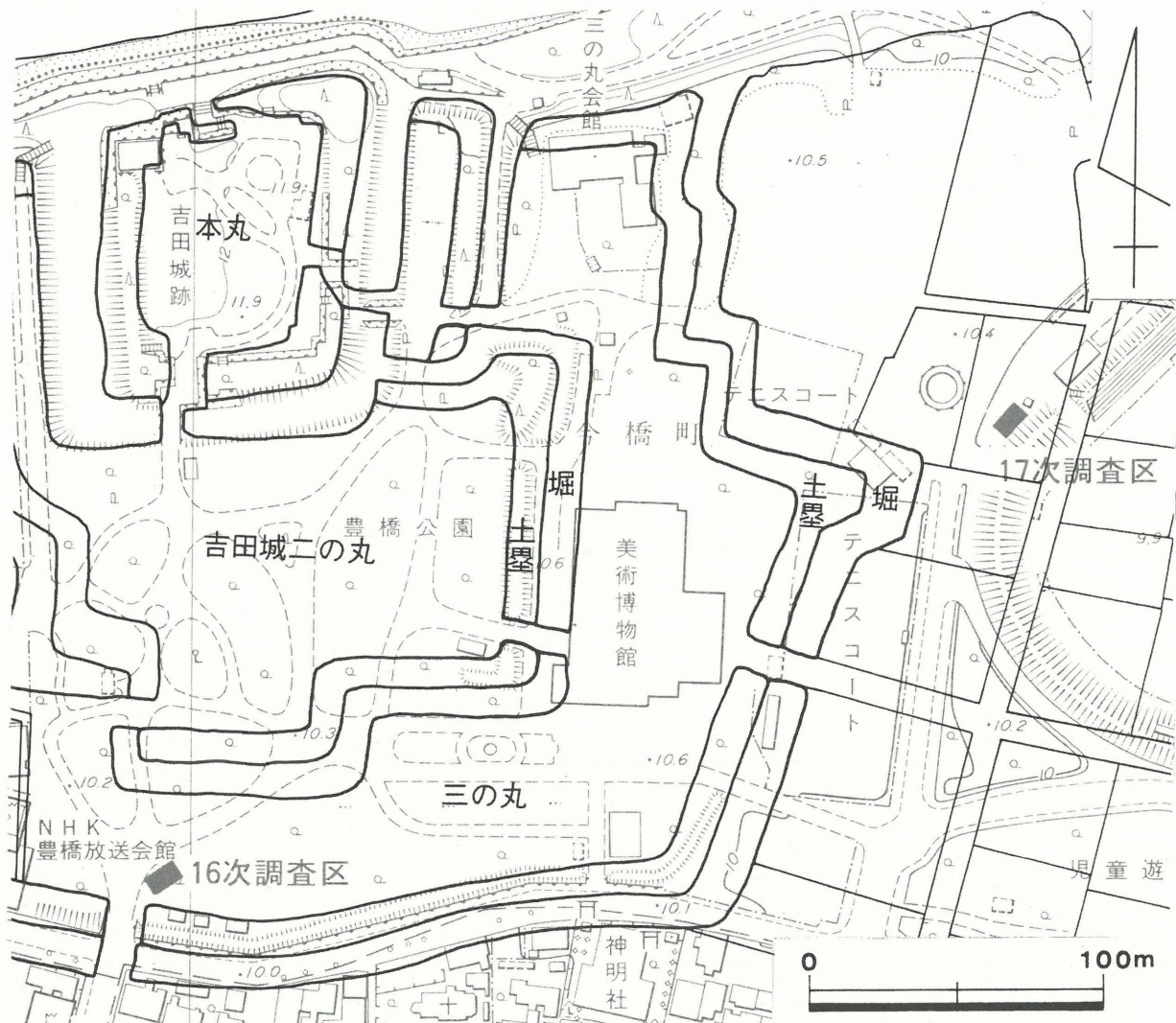
## 第2章 調査の経過

### 1. 調査に至る経過 (第4図)

吉田城址は、豊橋市教育委員会をはじめとして愛知県教育委員会や(財)愛知県埋蔵文化財センターによって、これまでに15次に及ぶ発掘調査が行われている。

今回行われた16次調査は、平成10年9月に豊橋市公園緑地課から文化財保護法第57条の3第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知が提出されたことに始まる。これは豊橋公園内にある古い便所に替えて新たに便所を建築しようとするもので、対象地は吉田城の三の丸門に近い場所に当たっている。また17次調査については、同様に平成10年10月に豊橋市教育委員会スポーツ課から埋蔵文化財発掘の通知が提出された。これも豊橋球場にある古い便所を新築しようとするもので、対象地は吉田城藩士屋敷地の一部に当たっている。

豊橋市教育委員会文化振興課では、いずれの地点も遺構は良好に遺存しているものと判断し、便所建築部分の50㎡についてそれぞれ発掘調査を実施することとした。



第4図 調査区位置図 (1/2,500)



## 2. 調査の経過と方法

調査は、いずれも便所建築予定地の10m×5m程度の範囲であるため、調査区は16次調査区がA-1区、17次調査区がB-1区としてそれぞれ任意で設定し、座標を後から示すという方法を行った。

調査区周辺は、標高10m程の比較的平坦な地形となる。一部分を除いて基本的に堆積土は見られないが、吉田城の築城や改築、歩兵第十八聯隊設置等に伴う造成土や攪乱層はこれまでの調査でも確認されている。基本的な層序は、表土・攪乱層の下が地山（黄褐色砂礫土）となっている。このため、遺構検出面（＝地山面）までは重機で表土を剥ぎ、遺構の検出・掘り下げは人力で行った。なお、16次調査区では、歩兵第十八聯隊関連の遺構が検出されたため、地山面よりも少し高い位置から人力で掘り下げていった。

以下は、各調査区の簡単な調査経過である。

### 16次調査区の調査経過

- ・10月21日 重機による表土剥ぎ。調査用具等の搬入。
- ・10月22日～10月30日 遺構の精査及び、遺構の掘り下げ。
- ・10月31日～11月4日 遺構の掘り下げ、遺構図等の作成と遺構写真撮影。
- ・11月5日 高所作業車による全景写真撮影。16次調査区の調査を終了する。

調査区内にコの字に近い形で、コンクリートの基礎が検出された。位置的には歩兵第十八聯隊の「面会所」の基礎と考えられる。この下からは、戦国期を中心とする溝・土壇等が検出されているが、江戸期の遺構・遺物は少ない。また、隣接して「後年の太鼓櫓」（安政年間に移ったと考えられる）があったとされる高まりが残っているが、これに関連した遺構は確認できなかった。

### 17次調査区の調査経過

- ・11月4日 重機による表土剥ぎ。調査用具等を16次調査区より搬入。  
調査区の西端は、幅0.5～1m程が水道管理設のため攪乱を受けている。
- ・11月5日～11月18日 遺構の精査及び、遺構の掘り下げ。
- ・11月19日～11月20日 遺構の掘り下げ、遺構図等の作成と遺構写真撮影。
- ・11月24日 高所作業車による全景写真撮影。17次調査区の調査を終了する。

この調査区を「吉田藩土屋敷図」（天保6年～嘉永2年頃作・豊橋市美術博物館所蔵）と重ね合わせてみると、三の丸東側の藩土屋敷地の「最勝院」という記述が見られる場所に当たる。但し、これに関連する遺構は確認できなかった。

また予想に反して8世紀後半～9世紀前半頃の総柱建物や溝・土壇が検出され、これに伴う遺物が出土している。この総柱建物や溝は、非常に規格性の高いものである。

## 第3章 16次調査

16次調査区は、吉田城三の丸の三の丸門のすぐ北側に位置し、全体的には中世から近世にかけての遺構・遺物が中心である。また、歩兵第十八聯隊関連の遺構も存在する。

この調査区は、便所築造予定地に設定されたもので、10m×5m程度の狭い範囲であるためA-1地区のみとなる。

### 1. 遺構 (第5～8図)

A-1地区は、幅約5m、長さ10m程の調査区である。遺構検出面(=地山面)は標高9.50～9.70m程で、中央部分がやや低くなっている。遺構は、中央付近に溝(SD)が検出され、この両側には大小の土壇(SK)が見られる。掘立柱建物等の配列を示すものはなく、また溝以外で遺物を伴うものは少ない。なお、歩兵第十八聯隊関連と考えられるコンクリート基礎がコの字状に検出されており、位置的には面会所の遺構(以下、面会所遺構と呼ぶ)と推測される。

#### A. 溝

溝は、3条が確認されている。明確な溝と土壇状の連続からなるものが見られるが、調査区が限られているため全体形の分かるものは少ない。

#### SD-1 (第5図)

調査区のほぼ中央で検出されたもので、東西方向に直線的に伸びている。SD-3を掘り込んでいるが、SK-2に壊されている。

規模は、幅0.3m前後と比較的一定で、長さは約1.3mを測る(計測値は遺存値である。以下同様)。溝の断面は箱形で、深さは10～15cmを測る。西端と東端との高低差は約2cmを測り、西から東に向かって少しずつ低くなっている。埋土は、淡茶褐色砂礫土である。出土した遺物は土師器小皿の小片のみで、遺構の時期ははっきりしないが、他の遺構との重複関係から16世紀以降のものであろう。

#### SD-2 (第5～7図)

調査区の北側で検出されたもので、後述するSD-3とほぼ並行しながら東西方向に直線的に伸びている。中央部は陸橋状となり、東端は面会所遺構によって壊されている。また南側の肩部は、SD-3によって全体的に壊されている(第7図)。

規模は、幅最大1.9m、最小1.6m、平均1.8mで、長さは約5.3mを測る。溝の断面は、浅いU字状で、途中で土壇状となりさらに深くなる。深さは、浅い部分で15cm前後、深い部分では40～50cm程を測る。東側と西側の底面の高低差は約19cmを測り、西側の底面が全体的に低くなっている。埋土は、淡茶灰色砂質土(上層)や淡灰色砂質土及び地山土混じり(下層)となる。出土した遺物には灰釉系



陶器碗、陶器碗・鉢・播鉢、磁器碗、土師器皿・鍋等（第9図1～6）があり、このうち下層からは土師器皿（同図3）がほぼ完形な状態で出土している（第6図）。遺構の時期は、15世紀のものであろう。

#### SD-3（第5・7図）

SD-2にほぼ並行しながら東西方向に延びている。溝の上部はSD-1やSK-2に掘り込まれ、また溝両端は面会所遺構によって壊されている。

規模は、幅最大1.7m、最小1.2m、平均1.4mで、長さは約6mを測る。溝の断面は底面の広いU字状となるが、南側の肩部は段となる。深さは30～50cmを測る。東端と西端との高低差は約3cmを測り、西から東に向かって少しずつ低くなっている。埋土は、第7図に示したように暗灰色砂質土（4層）や多量の炭を含む暗青灰色砂質土（5層）等で、遺物については5層を境に上下2層に分けて取り上げた。出土した遺物には灰釉系陶器小片、陶器碗・壺・甕、土師器小皿・皿・鍋等（第9・10図7～21）があり、遺構は15世紀後半～16世紀前半のものであろう。

#### B. 土壌

土壌は、径2mを越える大きなものから柱穴状の小さなものまで、様々な形態のものが調査区全体にわたっている。ここでは、時期を判定することのできる遺物が出土している土壌を中心に述べることにする。

#### SK-1（第5図）

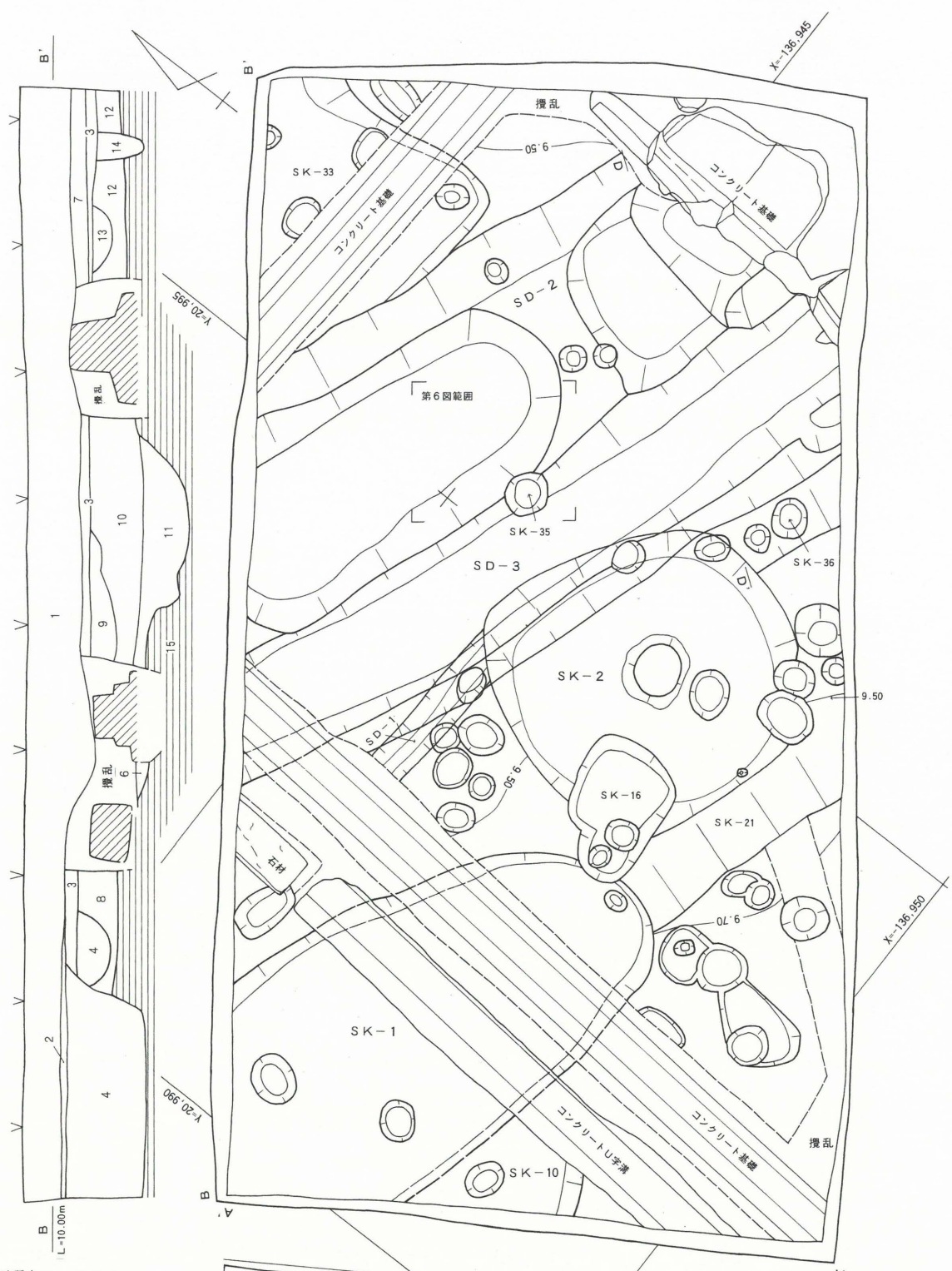
平面形は長楕円形と考えられるが、東側は調査区外となり、また中央部は面会所遺構によって大きく壊されている。規模は長径400cm以上×短径約220cm、深さは40cm程度（断面では約60cm）を測る。埋土は、地山混じりの灰褐色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗、陶器碗、土師器皿・鍋等（第10図22～24）があり、遺構は15世紀後半～16世紀前半のものであろう。

#### SK-2（第7図）

平面形は方形に近い円形を呈し、SD-1やSD-3を掘り込んでいる。規模は径約230cmで、深さは35～40cm程度を測り、中央付近には径約50cm、高さ10cm程の高まりが見られる。埋土は、地山混じりの暗茶褐色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器鉢・甕、陶器皿・播鉢、土師器小皿・皿・鍋、軒平瓦・平瓦・丸瓦等（第10図25～29）が混在する。遺構は江戸時代後期のものであろう。

#### SK-10（第5図）

平面形は緩やかなカーブが僅かに見られるため円形に近いものと推測されるが、SK-1や面会所遺構によって大きく壊されているためはっきりしない。規模は長さ135cm以上、幅75cm以上で、深さは38cm程度を測る。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗と土師器鍋（第10図30）があり、遺構は16世紀前半以前のものであろう。



1. 灰色砂質土(表土・攪乱層を含む)
2. 黒灰色砂質土(砂層に近い)
3. 淡黄灰色砂層
4. 灰褐色砂質土(地山土混じり)
5. 暗灰色砂質土
6. 淡黄灰色粘質土(SD-3埋土)
7. 淡灰色砂質土(砂層に近い)
8. 淡灰色砂質土
9. 黒灰色砂質土(SD-2埋土)
10. 淡茶褐色砂質土(SD-2埋土)
11. 淡灰褐色砂質土(SD-2埋土)
12. 淡茶灰色砂質土
13. 淡灰色砂質土(礫混じり)
14. 暗茶褐色砂質土
15. 黄褐色シルト質土(地山)



第5図 16次調査区全体図 (1/50)

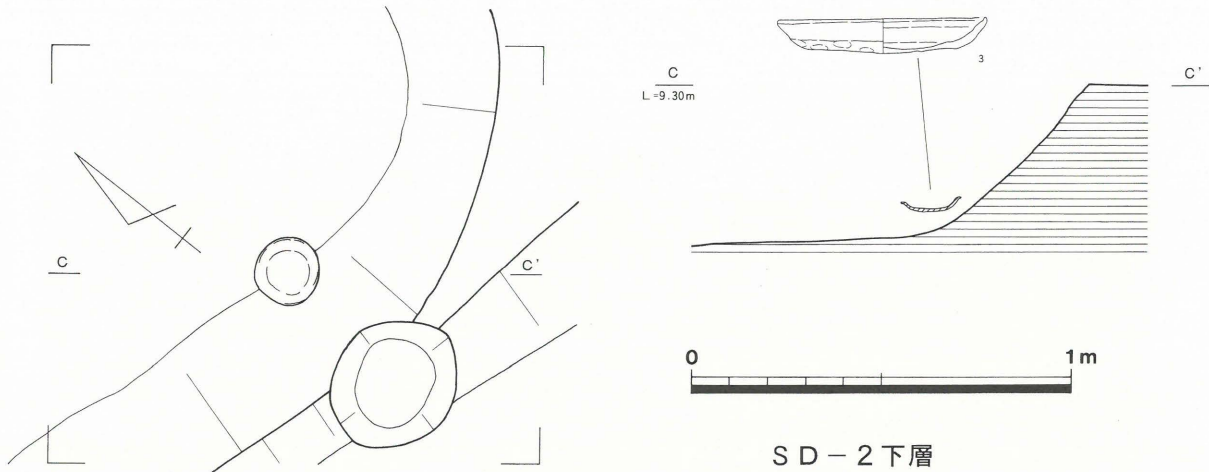


**SK-16 (第5図)**

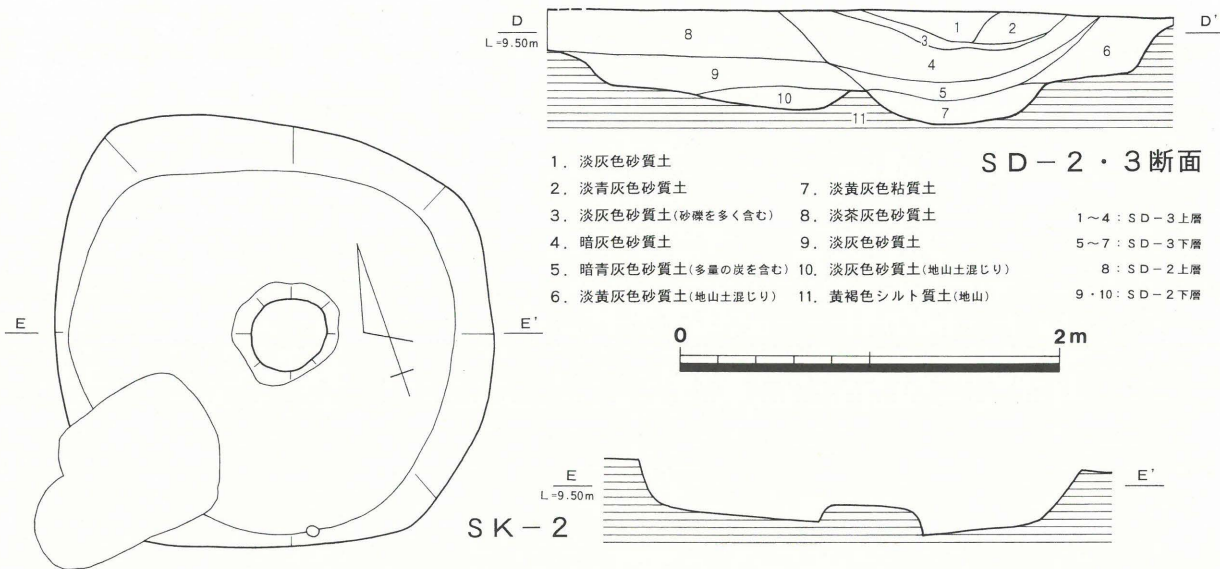
平面形は隅丸の方形で柱穴状の形態となるが、他の土壌と重複している。規模は一辺約80cm、深さは50cm程度を測る。埋土は、暗灰色砂質土である。遺物が出土していないため遺構の時期は明らかではないが、SK-2に壊されていることから江戸時代後期以前のものであろう。

**SK-21 (第5図)**

平面形についてはSD-3に並行するように直線的な落ち込みが見られる以外、SK-1やSK-2等によって壊されているためはっきりしない。規模は長さ約185cmで、SD-3あたりまで北側に向かって緩やかに傾斜し、深さは最も深い部分で20cm程度を測る。埋土は、淡茶褐色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗・壺、土師器小皿・鍋(第10図31)があり、遺構は16世紀前半以前のものであろう。



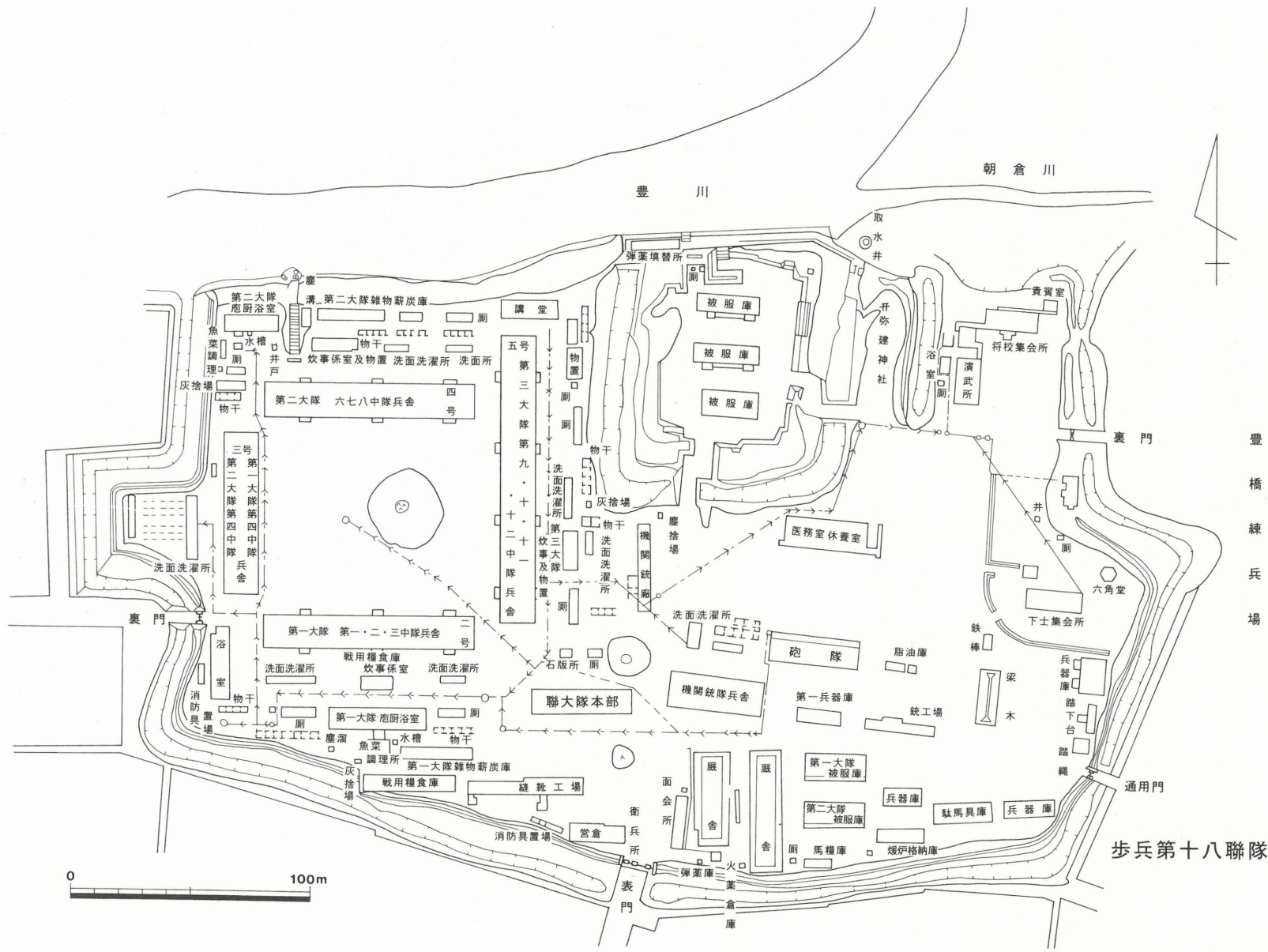
第6図 16次調査区遺物出土状況図(1/20)



第7図 16次調査区遺構実測図(1/40)

SK-33 (第5図)

平面形についてはL字状となる部分が検出されている以外、多くが調査区外となることや面会所遺構によって壊されているためはつきりしない。規模は東西200cm以上×南北195cm以上で、深さは10



第8図 歩兵第十八聯隊兵舎等配置図 (1/25,000)



～12cm程度を測る。埋土は、淡茶灰色砂質土である。遺物が出土していないため遺構の時期は明らかではないが、SD-2に壊されていることから15世紀以前のものであろう。

#### SK-35 (第5図)

平面形は円形で柱穴状の形態となり、SD-2及びSD-3を掘り込んでいる。規模は径約35cm、深さは20cm程度を測る。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には土師器鍋(第10図32)があり、遺構は15世紀後半～16世紀前半のものであろう。

#### SK-36 (第5図)

平面形は円形で柱穴状の形態となるが、SD-3によって上部が壊されている。規模は径約30cm、深さは35cm程度を測る。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗、土師器小皿等(第10図33)があり、遺構は16世紀前半以前のものであろう。

### C. 歩兵第十八聯隊関連遺構

#### 面会所遺構 (第5・8図)

調査区のほぼ中央にコの字状に検出されたコンクリート基礎は、歩兵第十八聯隊の兵舎等配置図(第8図)との位置関係から面会所の建物基礎と考えられる。

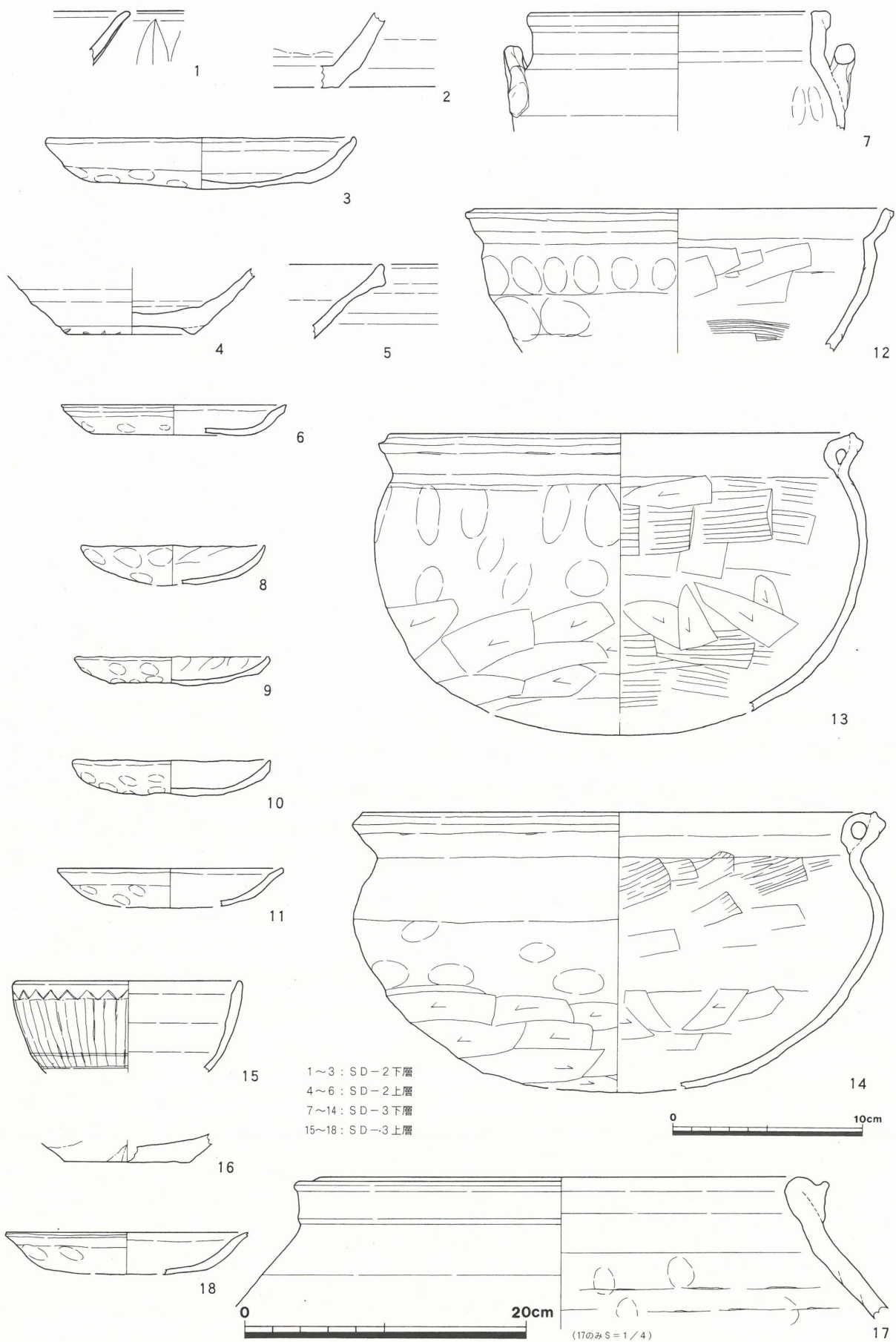
このコンクリート基礎は、東側の部分が外側に倒れているが、これ以外は原位置を保っている。基礎の断面は凸字状で、幅約40cm、高さは残りの良い部分で約50cmを測る。西側の基礎の外側にはコンクリートによる幅約25cm、深さ25cm程度のU字溝が並行し、この北端には一辺20cm程の石材が置かれている。面会所遺構の規模は、残存する基礎から東西約5.4m×南北8m以上を測り、3間×4間以上の建物が建っていたものと推測される。なお、第8図からは3間×12間の規模と推測される。

## 2. 遺物 (第9・10図、第1表)

16次調査区から出土した遺物には、須恵器・灰釉系陶器・陶器・磁器・土師器・瓦等があり、コンテナ箱(34×54×20cm)に3箱程度で、陶器・土師器の出土が比較的目立っている。なお、遺物についての細かな調整・法量等は第1表の観察表に記した。

#### SD-2下層 (1～3)

1は青磁碗で、口縁部は外方に伸び、外面には蓮弁文が見られる。2は陶器鉢で、底部は平坦となり、体部は外方に直線的に伸びる。体部内外面には灰釉が掛かる。3は土師器皿で、口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は小さくつまみ上げている。口縁部ヨコナデ、これ以外はナデ・指押さえ。これらは、15世紀代のものであろう。



第9図 16次調査区出土遺物実測図一 (1/3・1/4)



#### SD-2 上層 (4~6)

4は灰釉系陶器碗で、口縁部に向かって内湾気味に立ち上がる。高台は扁平な三角形となり、接地面には舂殻痕が見られる。Ⅲ期に位置付けられ、13世紀中葉のものと考えられる(註1)が、他からの混入品であろう。

5は陶器挿鉢で、口縁部は外方に開き、端部は肥厚する。6は土師器皿で、口縁部は小さく立ち上がり、端部は僅かに外反する。調整は、口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。これらは、15世紀末に位置付けられよう。

#### SD-3 下層 (7~14)

7は陶器壺で、肩部に把手が付く。口縁部は垂直に立ち上がり、端部は平坦面となる。調整は回転ナデで、把手部の内面には指押さえが施される。8~10は土師器小皿で、口縁部は小さく立ち上がる。調整はいずれも内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。11は同皿で、口縁部は小さく立ち上がり、端部は僅かに外反する。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。12~14は同鍋で、いずれも「く」の字状口縁鍋となる。12については口頸部がくびれることなく、体部は鉢状となる。13・14は口縁部が受口状に外反し、体部は扁平となる。いずれも調整は口縁部がヨコナデ、体部外面がナデ・指押さえで、その下半はヘラケズリ。体部内面は、板ナデで一部にヘラケズリが施される。これらは、15世紀後半~16世紀前半に位置付けられよう。

#### SD-3 上層 (15~21)

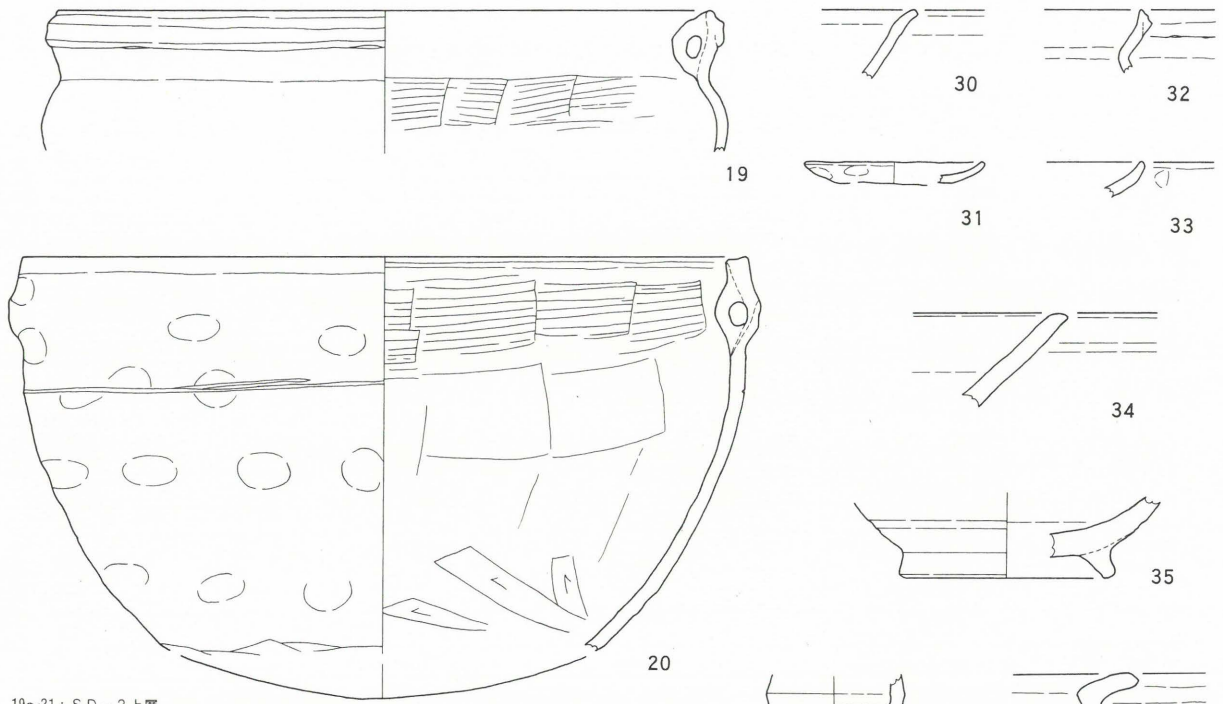
15は陶器碗で、口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸く収める。外面には、ヘラ描きによる文様が施され、また内外面には灰釉が掛かる。16は同皿で、底部は平坦となる。底部外面には糸切り痕が残り、体部外面には灰釉が掛かる。17は常滑窯産の甕で、端部を折り返している。調整は体部内面がナデ・指押さえ、これ以外は回転ナデである。これらは、16世紀前半に位置付けられよう。

18は土師器皿で、口縁部は小さく立ち上がり、端部は僅かに外反し沈線を巡らす。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。19~21は同鍋で、このうち19は「く」の字状口縁鍋、20・21は半球形鍋となる。19は口縁部がくの字状に屈曲し、体部は扁平になると考えられる。調整は、口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ、体部内面板ナデ。20・21は口縁部が僅かに内湾し、端部上端は少し窪む。体部最大径付近には、一条のヘラによる沈線が巡る。調整は口縁端部ヨコナデ、体部外面ナデ・指押さえ、体部内面板ナデ。また、底部近くは内外面ヘラケズリとなる。これらは、15~17に伴う時期のものであろう。

#### SK-1 (22~24)

22は陶器天目茶碗で、口縁部は内湾気味に開き、端部は小さく屈曲する。高台部は削り出し、これ以外は回転ナデで、内外面には鉄釉が掛かる。15世紀後半~16世紀前半に位置付けられよう。

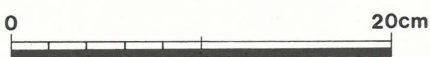
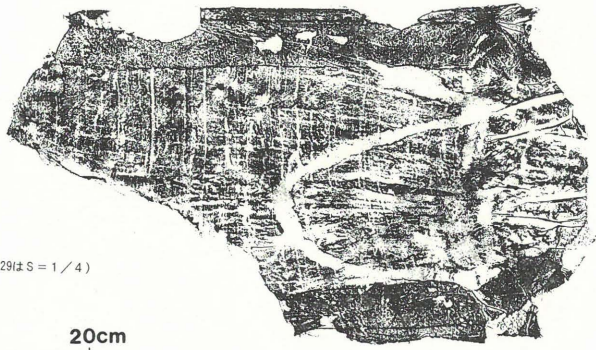
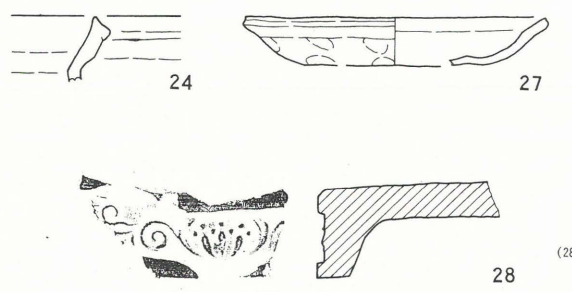
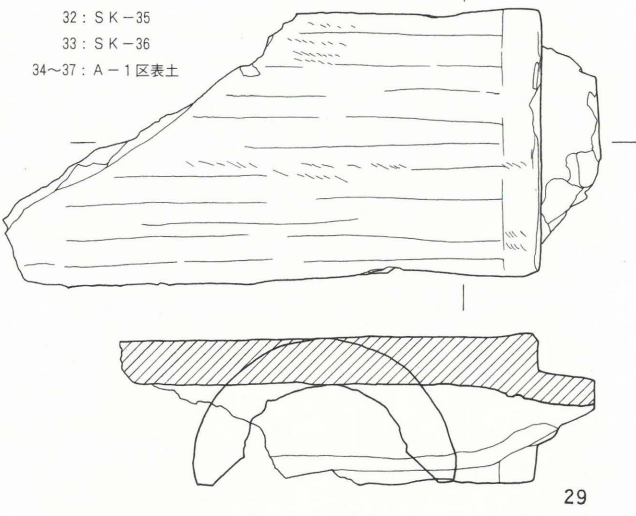
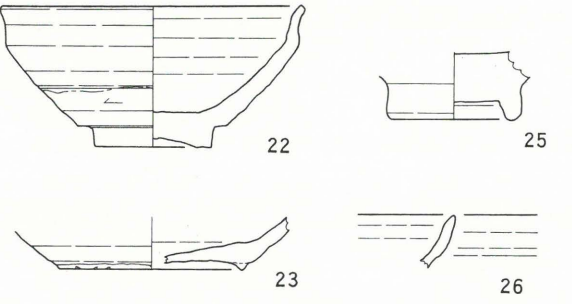
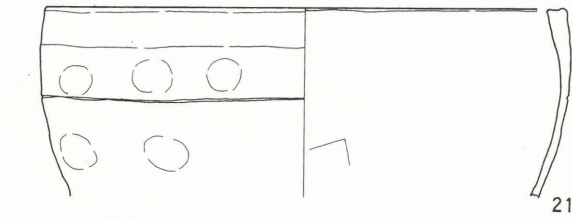
23は灰釉系陶器碗で、口縁部に向かって内湾気味に立ち上がる。高台は低く小さな三角形となり、接地面には舂殻痕が見られる。Ⅲ期に位置付けられ、13世紀~14世紀前半のものと考えられるが、他



19~21: SD-3上層  
 22~24: SK-1  
 25~29: SK-2



30: SK-10  
 31: SK-21  
 32: SK-35  
 33: SK-36  
 34~37: A-1区表土



(28・29はS=1/4)

第10図 16次調査区出土遺物実測図一2 (1/3・1/4)



からの混入品であろう。

24は土師器鍋で、いわゆる「く」の字状口縁鍋となり、口縁部は緩やかに屈曲する。調整は口縁部ヨコナデで、外面には煤が付着する。22に伴うものであろう。

#### SK-2 (25~29)

25は磁器碗で、器壁は非常に厚く、高台は削り出しによる。26は陶器碗で、口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部はやや尖り気味となる。調整は回転ナデで、全面に灰釉が掛かる。27は土師器皿で、口縁部は小さく立ち上がり、端部は僅かに屈曲する。調整は口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。このうち、27は15世紀代のものであろう。

28は軒平瓦で、3葉の中心飾りがあり、その両側には単線による唐草文が見られる。29は玉縁を有した丸瓦で、凸面は縄目叩き後ナデによる調整で、凹面には布目痕が残る。これらは、江戸時代後期のものであろう。

#### SK-10 (30)

30は灰釉系陶器碗で、口縁部は外方に直線的に伸びる。小片であるため帰属時期ははっきりしないが、13~14世紀のものであろう。

#### SK-21 (31)

31は土師器小皿で、口縁部が僅かに立ち上がる。調整は内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。帰属時期ははっきりしない。

#### SK-35 (32)

32は土師器鍋で、いわゆる「く」の字状口縁鍋となり、口縁部は緩やかに屈曲する。調整は口縁部ヨコナデ。15~16世紀のものであろう。

#### SK-36 (33)

33は土師器小皿で、口縁部が僅かに立ち上がる。調整は内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。帰属時期ははっきりしない。

#### 表土 (34~37)

34・35は灰釉系陶器鉢で、口縁部は直線的に外方に伸び、端部は丸く収める。高台はしっかりとした台形でハの字状に短く開く。回転ナデによる調整。12世紀後半~13世紀前半のものであろう。36は陶器壺で、高台部は小さく削り出し、体部は内湾気味となる。調整は内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリで、体部外面には鉄釉が掛かる。15~16世紀のものであろう。37は土師器甕で、口縁部は大きく屈折し、内面に明瞭な稜を有する。調整は口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ。9世紀前半に位置付けられよう。

注1 出土遺物の編年的位置付けについては、次のものを主に参考としている。

藤澤良祐 1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号

三重県埋蔵文化財センター

赤塚次郎編 1996『鍋と甕そのデザイン』第4回考古学フォーラム

瀬戸市史編纂委員会 1993『瀬戸市史 陶磁史篇四』

第1表 16次調査区出土遺物観察表

遺物NO.	区・遺構	器種・分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整	備考
9- 1	A-1 SD-2下	Z碗		(2.8)			密	良好	淡灰色	内外面に淡緑灰色の釉	外面に蓮弁文
2	A-1 SD-2下	T鉢		(3.9)			密	良好	淡灰褐色	内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	灰釉
3	A-1 SD-2下	H皿	16.2	2.7			密	良好	乳白色	口縁部ヨコナデ、内面ナデ	
4	A-1 SD-2上	P碗		(3.5)	6.6		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	高台部に粗殻痕
5	A-1 SD-2上	T播鉢		(4.0)			密	良好	淡灰白色	口縁部回転ナデ	鉄釉
6	A-1 SD-2上	H皿	12.0	1.6		やや粗雑	良好	淡赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ナデ		
7	A-1 SD-3下	T壺	15.6	(6.3)		最大17.6	密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ	肩部に把手 鉄釉
8	A-1 SD-3下	H小皿	9.7	(2.2)			密	良好	淡赤褐色	内外面ナデ・指押さえ	
9	A-1 SD-3下	H小皿	10.3	1.5			密	良好	淡褐色	内外面ナデ・指押さえ	
10	A-1 SD-3下	H小皿	10.4	1.9			密	良好	淡赤褐色	内外面ナデ・指押さえ	
11	A-1 SD-3下	H皿	11.8	(2.0)			密	良好	乳白色	口縁部ヨコナデ、内面ナデ	
12	A-1 SD-3下	H鍋	22.6	(7.6)		頸部径20.6	密	良好	淡茶褐色	口縁部ヨコナデ、体部内面板ナデ	
13	A-1 SD-3下	H鍋	24.4	(14.8)		最大26.1	密	良好	淡黄白色	口縁部ヨコナデ、体部外面下半ヘラケズリ	
14	A-1 SD-3下	H鍋	27.2	(14.6)		最大28.1	密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ、体部外面下半ヘラケズリ	
15	A-1 SD-3上	T碗	11.8	(4.9)			密	良好	淡白褐色	内外面回転ナデ	内面にヘラ描文 灰釉
16	A-1 SD-3上	T皿		(1.5)	6.7		密	良好	淡灰白色	底部外面糸切り	外面に灰釉
17	A-1 SD-3上	T甕	34.0	(10.1)			密	良好	茶褐色	口縁部ヨコナデ、体部内面ナデ	常滑窯産
18	A-1 SD-3上	H皿	12.8	(2.2)			密	良好	乳白色	口縁部ヨコナデ、内面ナデ	
10- 19	A-1 SD-3上	H鍋	25.6	(5.5)		最大27.0	密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	体部内面板ナデ
20	A-1 SD-3上	H鍋	28.4	(15.4)			密	良好	茶褐色	口縁部ヨコナデ、底部付近ヘラケズリ	
21	A-1 SD-3上	H鍋	20.3	(7.4)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ、体部外面指押さえ	
22	A-1 SK-1	T天目茶碗	11.8	5.6	4.5		密	良好	灰色	高台部削り出し	鉄釉
23	A-1 SK-1	P碗		(2.1)	7.2		密	良好	淡灰色	底部外面糸切り	高台部に粗殻痕
24	A-1 SK-1	H鍋		(2.6)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ	
25	A-1 SK-2	Z碗		(2.7)	4.8		密	良好	白色	高台部削り出し	内外面に釉
26	A-1 SK-2	T碗		(2.1)			密	良好	灰色	内外面回転ナデ	灰釉
27	A-1 SK-2	H皿	11.8	(1.9)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ、内面ナデ	
28	A-1 SK-2	N軒平瓦					密	良好	淡灰白色	両面ナデによる調整	
29	A-1 SK-2	N丸瓦					密	良好	淡灰色	凸面縄目叩き後ナデ、凹面布目痕	
30	A-1 SK-10	P碗		(2.7)			密	良好	灰白色	内外面回転ナデ	
31	A-1 SK-21	H小皿	6.8	(0.8)			密	良好	淡黄褐色	内外面ナデ 指押さえ	
32	A-1 SK-35	H鍋		(2.4)			密	良好	淡黄白色	口縁部ヨコナデ	
33	A-1 SK-36	H小皿		(1.4)			密	良好	淡褐色	内外面ナデ・指押さえ	
34	A-1 表土	P鉢		(3.7)			密	良好	暗灰色	口縁部回転ナデ	
35	A-1 表土	P鉢		(3.2)	8.4		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、高台部貼り付け	
36	A-1 表土	T壺		(2.8)	4.2		密	良好	淡黄白色	高台部削り出し	鉄釉
37	A-1 表土	H甕		(3.1)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	

\*P-灰釉系陶器 T-陶器 Z-磁器 H-土師器 N-瓦  
 法量の単位はcm、( )は残存数値。底径には、脚部径や台部径を含む。



## 第4章 17次調査

17次調査区は、吉田城の東側の藩士屋敷地に位置し、全体的には古代と近世の遺構・遺物が中心である。また、歩兵第十八聯隊関連の遺構も存在する。

この調査区は、便所築造予定地に設定されたもので、10m×5m程度の狭い範囲であるためB-1地区のみとなる。

### 1. 遺構 (第11～13図)

B-1地区は、幅4.5～5m程、長さ10m程の調査区であるが、調査区の西端は水道管理設によって攪乱を受けている。遺構検出面(=地山面)は標高9.70m前後を測り、僅かに北に向かって傾斜している程度で比較的平坦である。遺構は、中央付近に掘立柱建物(SB)と溝(SD)が検出され、この溝の北側に比較的多くの土壌(SK)が見られる。なお、歩兵第十八聯隊関連と考えられる方形の土壌やコンクリート基礎を伴う土壌等も検出されている。

#### A. 掘立柱建物

掘立柱建物は、総柱のものが1棟確認されている。また、柱痕跡のある柱穴や柱穴状の土壌が多く見られることから、これ以外にも建物が存在する可能性がある。

#### SB-1 (第12図)

3間以上×3間の総柱建物で、主軸方位はN-1°-Eを測る。規模は、桁行4.875m以上、梁間3.75mをそれぞれ測り、柱間は桁行で1.625m、梁間で1.25mとなる。

柱穴は、いずれも一辺50～70cm程の方形あるいは長方形で、深さについては30～35cm程で比較的浅い。柱穴の埋土は、柱痕跡が黒灰色砂質土、掘方が地山土混じりの黒灰色砂質土である。柱穴からは、須恵器坏身・坏蓋、土師器甕、製塩土器等(第14図38～60)が比較的の小片となって出土している。建物の時期は、これらの遺物から8世紀後半～9世紀前半と推測される。

#### B. 溝

#### SD-1 (第12図)

調査区のほぼ中央で検出されたもので、主軸方位をSB-1とほぼ合わせるように東西方向に直線的に延びている。SB-1の柱穴P8他を掘り込んでいるが、SK-110やSK-123に壊されている。

規模は、幅が0.75～0.8mと比較的一定で、長さは約3.6mを測る。溝の断面は、北側の傾斜が急で底面が平坦な箱形となり、深さは20～30cmを測る。西端と東端との高低差は約12cmを測り、東から西に向かって少しずつ低くなっている。埋土は、黒灰色砂質土(上層)と地山土混じりの黒灰色砂質



第11図 17次調査区全体図 (1/50)



土（下層）で、特に下層は硬く締まっている。出土した遺物には須恵器坏身・坏蓋・壺・甕、土師器坏・甕、製塩土器等（第14図61～66）があるが、いずれも小片となっている。遺構の時期は、8世紀後半～9世紀前半と考えられ、SB-1よりも新しく位置付けられよう。

### C. 土壇

土壇は、一辺2mを越える大きなものから柱穴状の小さなものまで、様々な形態のものが調査区の北側に集中する状況で検出されている。ここでは、時期を判定することのできる遺物が出土している土壇を中心に述べることにする。

#### SK-1（第13図）

平面形は不整な長方形と考えられるが、北側及び西側が調査区外となっているためはっきりしない。規模は長さ255cm以上×幅120cm以上、深さは30cm程度を測り、底面は比較的平坦となる。埋土は、暗灰色砂質土である。遺物は、須恵器高坏、灰釉陶器碗、灰釉系陶器碗・壺、陶器碗・皿、土師器皿・鍋、瓦等（第14図67～75）が混在して出土し、またガラス片も含まれている。遺構は、歩兵第十八聯隊に伴う時期のものであろう。

#### SK-3（第11図）

平面形は円形で柱穴状の形態となるが、SK-1によって半分近くが壊されている。規模は径45cm程で、深さは24cm程度を測る。埋土は、黒灰色砂質土である。出土した遺物には須恵器小片、土師器甕等（第14図76・77）があり、遺構は9～10世紀のものであろう。

#### SK-10（第11図）

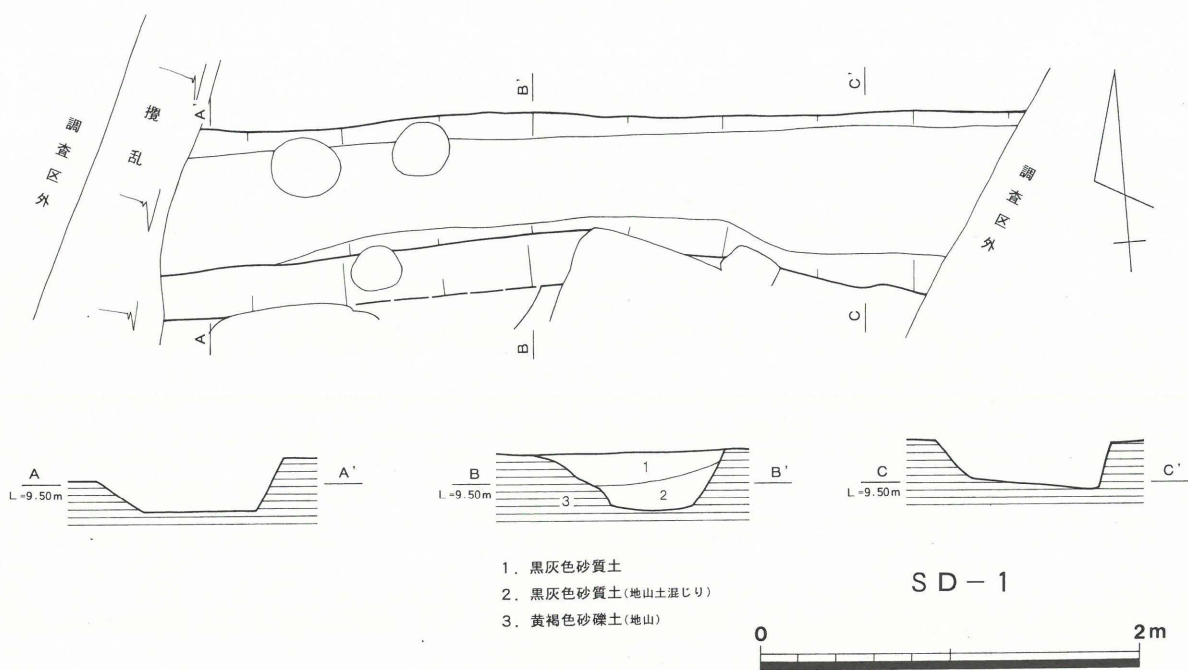
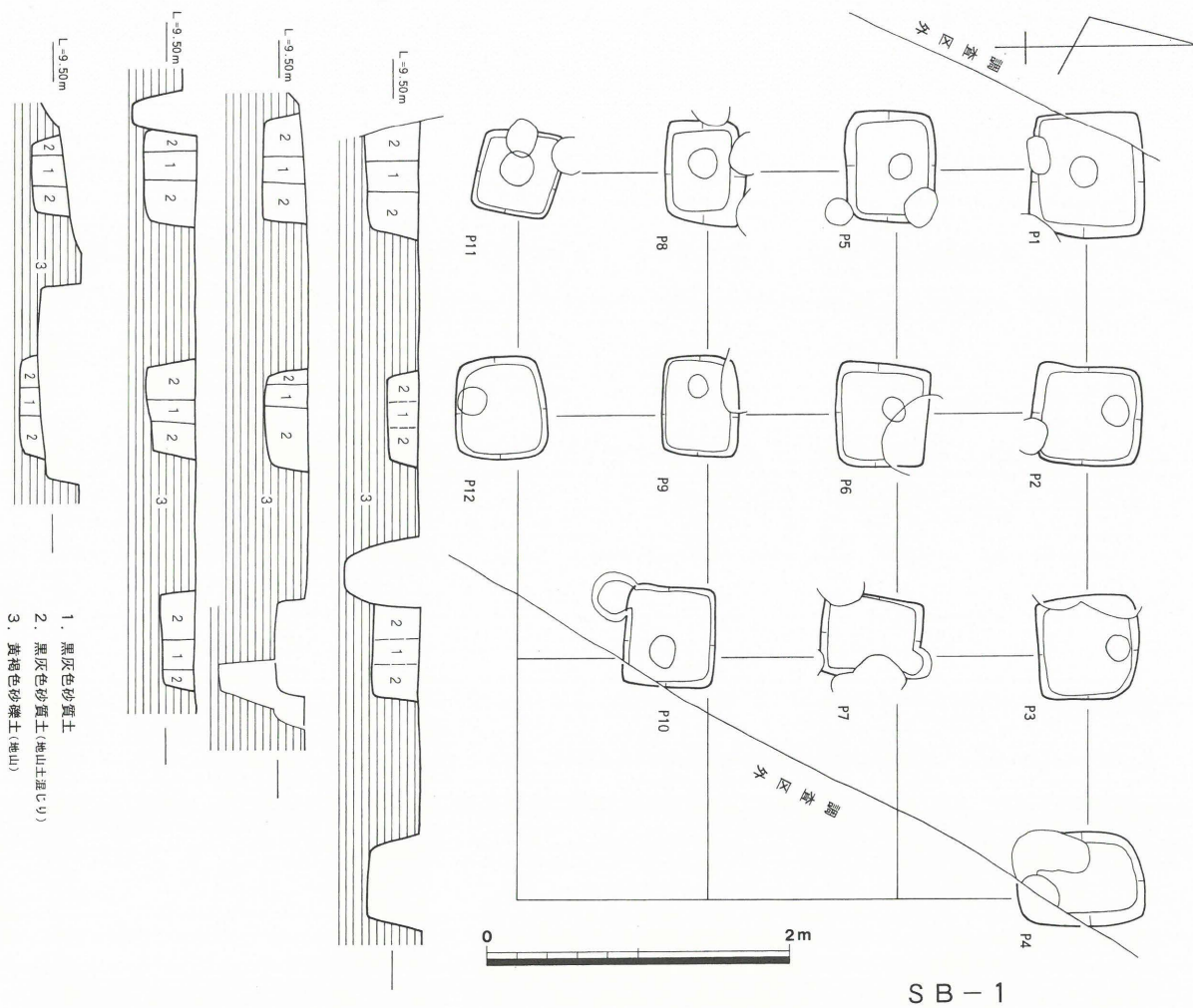
平面形は円形で柱穴状の形態となる。規模は径20cm程で、深さは27cm程度を測る。埋土は、黒灰色砂質土である。出土した遺物には須恵器壺・甕、灰釉陶器壺、土師器小片等（第14図78）があり、遺構は9～10世紀のものであろう。

#### SK-13（第11図）

平面形は不整な円形になると考えられるが、SK-14や小さな土壇によって半分以上が壊されているためはっきりしない。規模は径65cm以上で、深さは17cm以上を測り、中心に向かって挿鉢状に傾斜している。埋土は、黒灰色砂質土である。出土した遺物には須恵器蓋・壺・甕等（第14図79・80）があり、遺構は8世紀代のものであろう。

#### SK-14（第13図）

平面形は隅丸の長方形と考えられるが、北側が調査区外となっているためはっきりしない。規模は長さ150cm以上×幅約100cm、深さは93cm程度を測り、底面は比較的平坦となる。また、底面及び側面には、加工した木材が並べられていた。埋土は、砂礫混じりの灰色砂質土である。遺物は、須恵器



第12図 17次調査区遺構実測図-1 (1/50・1/40)



坏身・甕、陶器碗・甕、磁器碗、瓦、鉄釘等（第15図81～84）が混在して出土した。遺構は17～18世紀代のものであろう。

#### SK-16（第13図）

平面形は不整な円形で、いくつかの小さな土壙と重複している。規模は径100cm程で、深さは7～10cmを測り、底面は比較的平坦となる。埋土は、灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗、土師器鍋、陶器碗、瓦等が混在しており、遺構は近世のものであろう。

#### SK-18（第11図）

平面形は楕円形で、すぐ北側の土壌に一部が壊されている。規模は長径60cm×短径45cm程で、深さは45cm程度を測る。埋土は、黒灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉陶器碗、灰釉系陶器小片、土師器甕・鍋、土錘等（第15図85・86）が混在しており、遺構は15世紀後半～16世紀前半のものであろう。

#### SK-43（第11図）

平面形は楕円形で、規模は長径60cm×短径30cm程となり、深さは8cm程度を測る。埋土は、暗茶褐色砂質土である。出土した遺物には須恵器小片と陶器灯明皿（第15図87）があり、遺構は19世紀前半のものであろう。

#### SK-50（第11図）

平面形は楕円形であるが、中央部は方形の土壌によって壊されている。また、SB-1の柱穴P1を掘り込んでいる。規模は長径70cm×短径55cm程となり、深さは15cm以上で、中心に向かって播鉢状に傾斜している。埋土は、黒灰色砂質土である。出土した遺物は須恵器坏身・壺、土師器甕・甑等（第15図88・89）があり、7～8世紀のものと考えられるが、SB-1を壊していることから遺構は9世紀以降のものであろう。

#### SK-56（第11図）

平面形は不整な楕円形で、他の土壌によって一部が壊されている。また、SB-1の柱穴P3を掘り込んでいる。規模は長径60cm×短径50cm程となり、深さは38cm程度を測る。埋土は、黒灰色砂質土である。出土した遺物には須恵器坏身・坏蓋・甕、灰釉陶器碗、土師器甕等（第15図92）があり、遺構は9世紀代のものであろう。

#### SK-60（第11図）

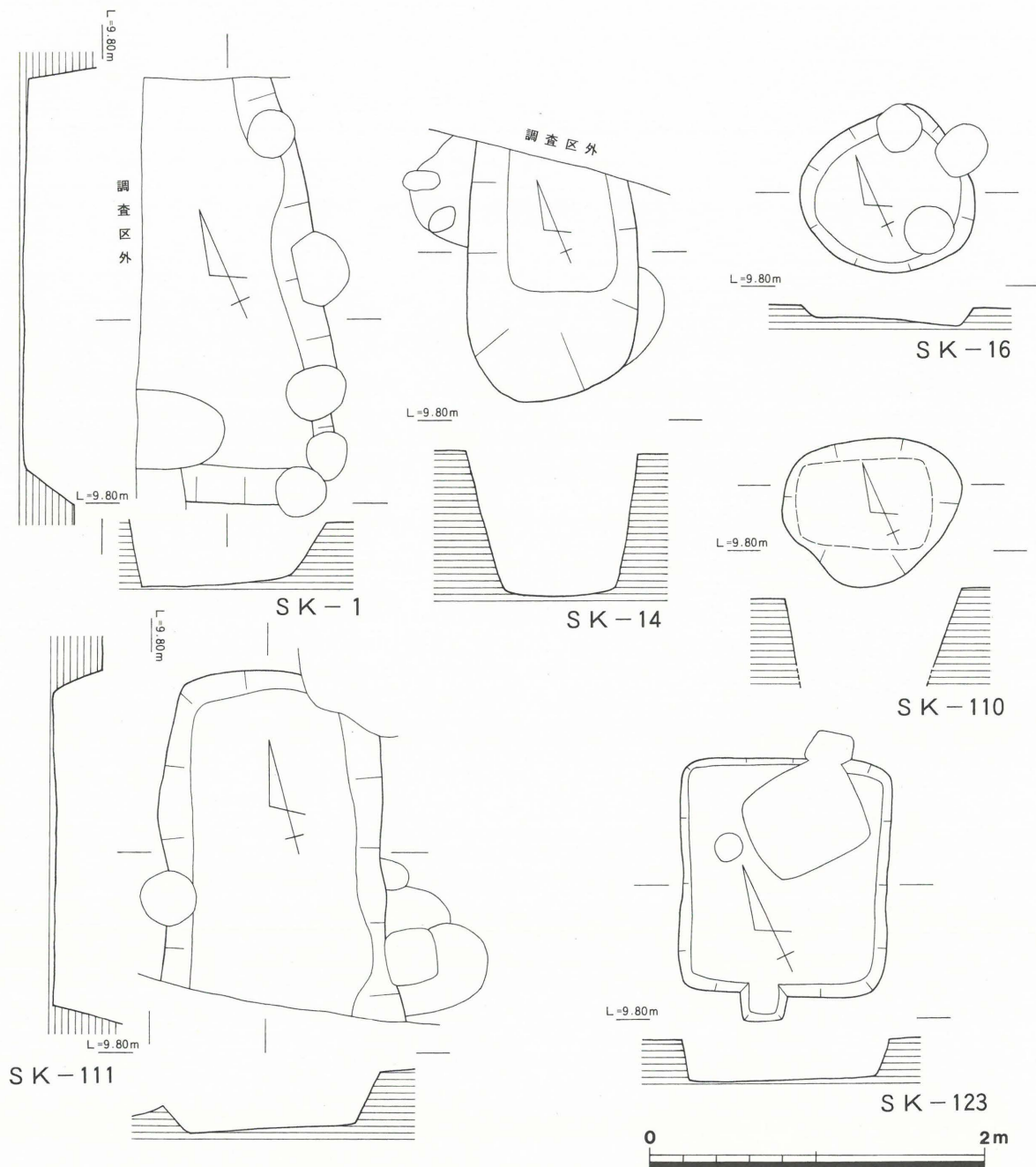
平面形は楕円形になると考えられるが、SB-1の柱穴P3等に壊されているためはっきりしない。規模は長径60cm×短径30cm以上となり、深さは20cm程度を測る。埋土は、黒灰色砂質土である。出土した遺物には須恵器坏身・甕、土師器甕・鍋等（第15図96・97）がある。97の土師器鍋は混入品と

考えられることから、遺構は9～10世紀のものであろう。

**SK-68 (第11図)**

平面形は楕円形で、SB-1の柱穴P6を壊している。規模は長径55cm×短径40cm程となり、深さは30cm程度を測る。埋土は、灰色砂質土である。遺物は、須恵器坏身・坏蓋・高坏、灰釉系陶器碗、陶器小片、土師器鍋、瓦等(第15図98~100)が混在して出土している。遺構は、歩兵第十八聯隊に伴う時期のものであろう。

**SK-105 (第11図)**



第13図 17次調査区遺構実測図-2 (1/40)



平面形は円形で柱穴状の形態となるが、SD-1に壊されているためはっきりしない。また、SB-1の柱穴P10との前後関係は不明である。規模は径30cm程で、深さはSD-1の底面から10cm程度を測る。埋土は、黒灰色砂質土である。出土した遺物には須恵器坏身・壺・甕、土師器甕等（第15図101）があり、遺構は9～10世紀のものであろう。

#### SK-108（第11図）

平面形は隅丸の長方形で柱穴状の形態となる。規模は35cm×20cm程で、深さは30cm程度を測る。埋土は、暗茶褐色砂質土である。出土した遺物には須恵器坏身・甕・硯、灰釉陶器壺、土師器甕等（第15図102・103）があり、遺構は10世紀～11世紀前半のものであろう。

#### SK-110（第13図）

平面形は楕円形で、途中から隅丸方形となる。SB-1の柱穴P11を掘り込んでいるが、SK-111には壊されている。規模は長径105cm×短径90cm程で、深さは掘りきっていないためはっきりしないが60cm以上を測る。埋土は、茶褐色砂土である。遺物は、須恵器坏身・壺・甕、陶器碗、磁器碗、瓦等が混在して出土している。遺構は、19世紀前半以前のものであろう。

#### SK-111（第13図）

平面形は長方形と考えられるが、攪乱や南側が調査区外となるためはっきりしない。SK-110の一部を壊している。規模は長さ200cm以上×短径135cm程で、深さは35cm程度を測り、底面は比較的平坦となる。埋土は、暗灰色砂質土である。遺物は、灰釉陶器碗、灰釉系陶器碗、陶器碗・皿・甕、磁器皿、瓦等（第15図104～110）が混在して出土している。遺構は、19世紀前半のものであろう。

#### SK-123（第13図）

平面形は長方形で、SB-1の柱穴P12などを壊している。規模は140cm×125cm程で、深さ5cm程度のところにコンクリートが薄く貼ってある。これを取り除くと深さは25～30cm程度を測り、底面は比較的平坦となる。コンクリート下の埋土は、暗灰色砂質土である。遺物は、須恵器甕、陶器播鉢、磁器碗、土師器小皿等が混在して出土している。遺構は、歩兵第十八聯隊に伴う時期のものであろう。

## 2. 遺物（第14・15図、第2表）

17次調査区から出土した遺物には、須恵器・灰釉陶器・陶器・磁器・土師器・瓦・製塩土器等があり、コンテナ箱（34×54×20cm）に4箱程度で、須恵器・製塩土器の出土が比較的目立っている。なお、遺物についての細かな調整・法量等は第2表の観察表に記した。

#### SB-1 P1（38・39）

38は須恵器坏身で、底部は平坦となり、断面台形のしっかりとした高台が付く。内面は回転ナデに

よる調整。O-10~IG-78号窯式に併行しよう（註1）。39は同甕で、調整は外面平行叩き、内面擦り消し。

#### SB-1 P2 (40~44)

40・41は須恵器坏身で、いずれも口縁部は外上方へ直線的に伸び、端部は丸く収める。調整は、内外面回転ナデ。42は同坏蓋で、端部は小さく屈折する。天井部外面に僅かに回転ヘラケズリが見られ、これ以外は回転ナデによる調整。43は同壺で、口縁部は小さく屈曲し、端部は肥厚して外傾面をつくる。調整は、内外面回転ナデ。44は製塩土器小型品（註2）と考えられるが、全体形ははっきりしない。外上方に伸びた口縁部はやや厚手で、端部は僅かに丸味を持つ。ナデ・指押さえによる整形。

#### SB-1 P4 (45~47)

45は須恵器坏蓋で、端部を小さく屈折させる。調整は内外面回転ナデ。46は同壺で、口縁端部は上下に肥厚する。内外面回転ナデによる調整。47は土師器坏で、口縁部は直線的となり、端部は面をなす。調整は外面ナデ、内面ヘラミガキで、内外面は赤彩されている。

#### SB-1 P5 (48~51)

48は須恵器坏蓋で、天井部は直線的となり、端部は小さく折れ曲がり丸く収める。内外面回転ナデによる調整。49は同高盤で、脚部は筒状となり、内面にはヘラ状工具による刺突が見られる。これ以外は回転ナデによる調整。50は同壺で、底部には断面台形のしっかりとした高台が付き、体部は外上方へ伸びている。底部外面回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデによる調整。51は土師器甕で、口縁部はくの字状に屈折し、端部は丸く収める。口縁部ヨコナデ、これ以外はナデ・指押さえによる調整で、三河型2（註3）に分類される。

#### SB-1 P6 (52~55)

52は須恵器坏身で、口縁部は外上方に直線的に伸び、端部は丸く収める。調整は内外面回転ナデ。また底部が摩滅していることから、箱坏となる可能性がある。53は同蓋で、口縁端部を小さく屈曲させ、丸く収める。内外面は回転ナデによる調整。54は同高盤で、口縁部を小さく屈曲させ、端部は僅かに面をなす。調整は内外面回転ナデ。なお小片であるため、傾きはもう少し起き上がる可能性がある。

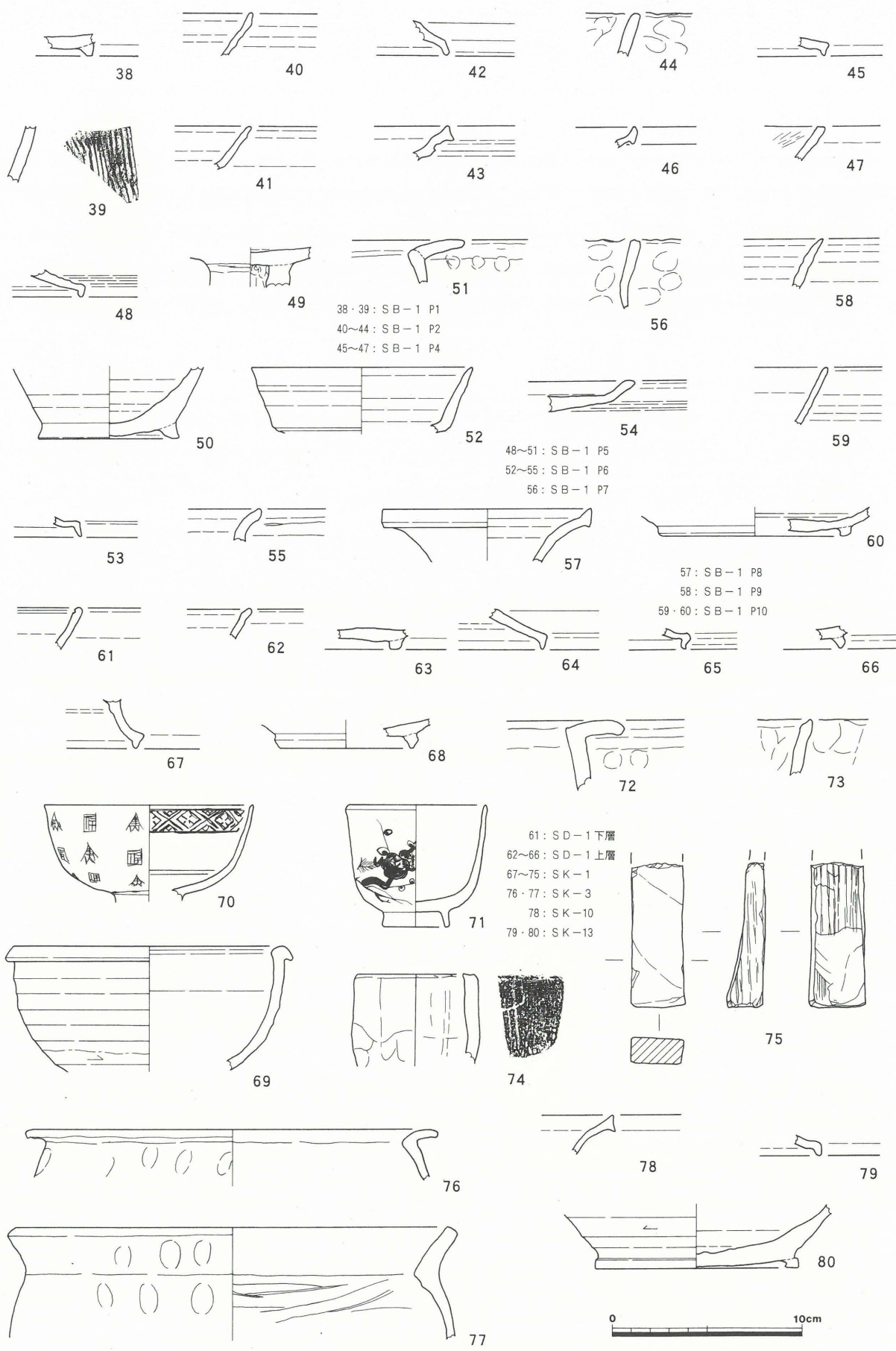
#### SB-1 P7 (56)

56は製塩土器小型品で、口縁部は緩やかに上方に伸び、端部は僅かに面となる。内外面ナデ・指押さえによる整形。また、表面の剥離が目立つ。

#### SB-1 P8 (57)

57は須恵器壺で、口縁部は大きく外反し、端部は上下に肥厚し面となる。内外面は、回転ナデによる調整。





第14図 17次調査区出土遺物実測図-1 (1/3)

#### S B - 1 P9 (58)

58は須恵器坏身で、口縁部は外上方へ直線的に伸び、端部は尖り気味に収める。内外面は、回転ナデによる調整。

#### S B - 1 P10 (59・60)

59・60は須恵器坏身。59は口縁部が外上方へ直線的に伸び、端部は丸く収める。調整は内外面回転ナデ。60は底部が平坦となり、断面台形の高台が付く。底部外面回転ヘラケズリ、内面は回転ナデによる調整。

なお、38～60のS B - 1出土遺物はいずれも小片で、帰属時期のはっきりするものは少ないが、42・45が8世紀前半、53が8世紀後半、51・52が8世紀後半～9世紀前半に、それぞれ位置付けられる可能性が高い。

#### S D - 1 下層 (61)

61は須恵器坏身で、口縁部は外上方へ直線的に伸び、端部内側は僅かに窪む。調整は内外面回転ナデ。7世紀後半に位置付けられる可能性がある。

#### S D - 1 上層 (62～66)

62・63は須恵器坏身。62は口縁部が外上方へ直線的に伸び、端部は丸く収める。調整は内外面回転ナデ。63は底部が平坦で、断面方形のしっかりとした高台が付く。底部外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデによる調整。64・65は同坏蓋。64は天井部が直線的となり、端部は小さく折れ曲がる。天井部外面に僅かに回転ヘラケズリが見られ、これ以外は回転ナデによる調整。65は端部を大きく屈曲させ、尖り気味に収める。内外面回転ナデによる調整。これらのうち、64は8世紀前半、65は8世紀後半～9世紀前半に、それぞれ位置付けられよう。

66は灰釉陶器碗で、高台は低い三日月高台となる。高台部貼り付けによるナデ、内面回転ナデによる調整。K-90～O-53号窯式に併行しよう。

#### S K - 1 (67～75)

67は須恵器高坏の脚部と考えられ、裾部は屈曲し端部は尖り気味となる。内外面回転ナデによる調整。7～8世紀のものと考えられるがはっきりしない。68は灰釉陶器碗で、高台は低い三日月高台となる。高台部貼り付けによるナデ、内面回転ナデによる調整。K-90～O-53号窯式に併行しよう。

69は陶器碗で、体部は内湾気味となり、端部は玉縁状となる。体部外面下半回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデによる調整で、灰釉が掛かる。70・71は磁器碗で、いずれも口縁部は内湾気味で、端部は丸く収める。高台部はいずれも削り出し。これら陶器・磁器は、19世紀代のものであろう。

72は土師器甕で、口縁部はくの字状に大きく屈折し、端部は丸く収める。口縁部ヨコナデ、これ以外はナデ・指押さえによる調整で、三河型2に分類される。73は製塩土器小型品で、口縁部は直線的に外上方に伸び、端部は僅かに面を持つ。ナデ・指押さえによる整形。



74は焼塩壺と考えられ、体部は筒状で、端部は平坦な面となる。外面ナデで、内面には布目状の圧痕が見られる。75は砥石で、石質は凝灰岩と考えられる。一部を除いて使用痕が見られる。これらは70・71に伴う時期のものであろう。

#### SK-3 (76・77)

76・77は土師器甕。76は、口縁部がくの字状に大きく屈折し、端部は丸く収める。口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデによる調整。三河型3に分類され、8世紀末～9世紀中葉に位置付けられよう。77は口縁部の屈折が弱く、端部は面となる。調整は、口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・指押さえ、内面板ナデ。清郷型1に分類され、10世紀中葉に位置付けられる可能性が高い。

#### SK-10 (78)

78は灰釉陶器広口瓶で、口縁部は大きく外反し、端部は上下に肥厚する。内外面回転ナデによる調整で、灰釉が掛かる。9～10世紀のものであろう。

#### SK-13 (79・80)

79は須恵器坏蓋で、端部は僅かに折れ曲がり、丸く収める。内外面回転ナデによる調整。80は同壺で、底部には小さめの高台が付き、体部は内湾気味に立ち上がる。外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデによる調整。このうち、79は8世紀前半に位置付けられるものであろう。

#### SK-14 (81～84)

81・82は陶器碗で、体部は内湾気味に立ち上がる。調整は、高台部削り出し、これ以外は回転ナデ。81は内面に灰釉が、外面に鉄釉が掛かる。82は、内面と外面の一部に灰釉が掛かる。83は土師質に近い火鉢で、口縁部は内湾し、端部は丸く収める。口縁部ヨコナデ、これ以外はナデ・指押さえ。84は鳥伏間瓦の一部と考えられ、接合面で大きく剥離している。瓦当面には、久世家の家紋「丸に並び鷹の羽」が見られる。久世家の家紋瓦からすれば、これらは17世紀末～18世紀初頭に位置付けられよう。

#### SK-18 (85・86)

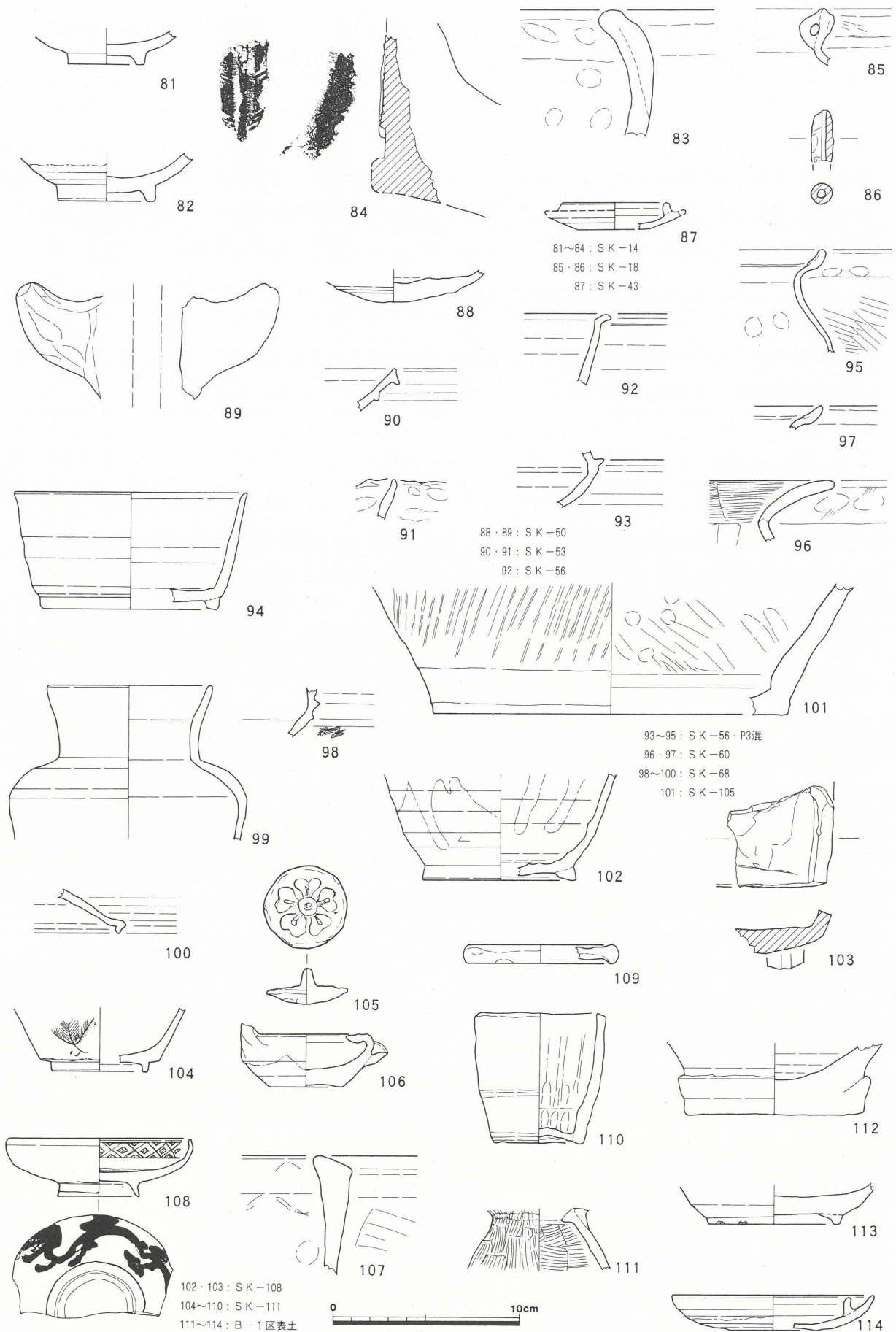
85は土師器鍋で、「く」の字状口縁鍋となり、口縁部は比較的直立する。調整は内外面ヨコナデ。86は土錘で、ナデ・指押さえによる整形。15世紀後半～16世紀前半のものであろう。

#### SK-43 (87)

87は陶器灯明皿で、底部は平坦となり、口縁部は外上方へ短く開く。調整は外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデで、全面に鉄釉が掛かる。19世紀前半のものであろう。

#### SK-50 (88・89)

88は須恵器坏身で、底部は丸味を帯びている。底部外面回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデによ



第15図 17次調査区出土遺物実測図一2 (1/3)



る調整。89は土師器甕の把手と考えられ、外上方へ短く伸びる。但し、把手付きの甕になる可能性もある。ナデ・指押さえによる整形。これらは、7～8世紀のものであろう。

#### S K-53 (90・91)

90は須恵器甕で、口縁部は外上方へ直線的に伸び、端部は肥厚して面をなす。また、外面には断面三角形の突帯が巡る。内外面回転ナデによる調整。91は製塩土器小型品で、口縁部は外上方に伸び、端部は僅かに波状となる。ナデ・指押さえによる整形。8～9世紀のものであろう。

#### S K-56 (92)

92は灰釉陶器平瓶の口縁部と考えられ、直線的に伸びた口縁部は端部を小さく屈折する。内外面回転ナデによる調整。猿投窯産と考えられ、K-14～K-90号窯式に併行しよう。

#### S K-56・S B-1 P3 (93～95)

93は須恵器坏身で、いわゆる古墳時代の合子型のものである。受け部は鋭く水平に伸びる。調整は底部外面の1/2程度が回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデ。5世紀後半のものであろう。94は同坏身で、底部は平坦となりしっかりとした高台が付く。口縁部は直線的に伸び、端部は鋭く収める。8世紀後半～9世紀中葉のものであろう。

95は土師器鍋で、口縁端部を内側に折り返すいわゆる伊勢型鍋である。調整は口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、体部内面ナデ。13世紀代のものであろう。

なお、これらの遺物は、S K-56かS B-1の柱穴P3のいずれかより出土したものであるが、取り上げ時に区分できなかったものである。

#### S K-60 (96・97)

96は土師器甕で、体部から大きく屈折した口縁部は僅かに外反して、端部は丸く収める。調整は内面板ナデ、外面はハケ後ナデ・指押さえ。9～10世紀のものであろう。97は同鍋で、口縁端部を内側に折り返すいわゆる伊勢型鍋である。調整は内外面ヨコナデ。14世紀代のものであろう。

#### S K-68 (98～100)

98は須恵器高坏で、いわゆる古墳時代の無蓋高坏である。口縁部近くの破片で、断面三角形の2条の突帯とその下には細かな波状文が施される。調整は内外面回転ナデ。99は同壺で、体部はやや扁平となる。口縁部は僅かに内湾しながら立ち上がり、端部は丸く収める。調整は内外面回転ナデ。98・99は器形や色調等から、5世紀後半の初期須恵器と考えられる。

100は須恵器坏蓋で、天井部は陣笠形となり、端部は小さく屈折する。内外面は回転ナデによる調整。8世紀後半～9世紀中葉のものであろう。

### SK-105 (101)

101は須恵器甕で、底部は平坦となり、体部は外上方へ直線的に伸びる。調整は内面ナデ、外面は平行タタキ及びナデで、底部外面は未調整。K-14~O-53号窯式に併行しよう。

### SK-108 (102・103)

102は灰釉陶器壺で、高台は台形でしっかりとし、体部は内湾気味に立ち上がる。調整は体部外面下半回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデで、内外面に灰釉が掛かる。K-90~H-72号窯式に併行しよう。103は陶硯で、風字硯となる。外面の剥離痕から、多角形の脚部が付くと考えられる。猿投窯産と考えられ、9世紀代のものであろう。

### SK-111 (104~110)

104は陶器碗で、高台部は削り出しとなり、体部は外上方へ直線的に伸びる。調整は回転ナデで、内外面に灰釉が掛かる。105・106は同ひょうそく及び蓋。蓋は円形で、中央につまみが付く。ナデ・指押さえによる整形で、外面に灰釉が掛かる。ひょうそくは、底部が平坦となり、口縁部は内側に大きく折れ曲がる。底部外面糸切り、体部外面下半は回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデで、内面及び外面の一部には灰釉が掛かる。107は常滑窯産と考えられる甕で、体部は垂直気味に伸び、端部は肥厚し面となる。口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデによる調整。108は磁器碗で、高台は細く、体部は内湾気味に小さく立ち上がる。また、外面には龍が描かれている。これら陶器及び磁器は、19世紀前半のものであろう。

109・110は、土師質の焼塩壺及び同蓋。109の蓋は円盤形で、端部が肥厚して丸く収める。ナデ・指押さえによる整形と考えられるが、内面の一部に布目状の圧痕が見られる。110は底部がやや上げ底で、体部は筒状となり、口縁端部は外傾する。調整は、底部付近が指押さえ、体部内外面はナデ・指押さえと考えられる。内面には縦方向の何らかの筋が見られ、布目状の圧痕である可能性が高い。これらは、104~108に伴うものであろう。

### 表土 (111~114)

111は土師器甕で、「ハ」の字状に開く台付甕の脚部になると考えられる。調整は内外面ハケメ。古墳時代前~中期のものであろうか。112は陶白で、底部は広く平坦となる。底部外面未調整、これ以外は回転ナデによる調整。9世紀前後のものであろう。113は灰釉系陶器碗で、高台は小さく粉殻の圧痕が見られる。底部外面糸切り後ナデ、これ以外は回転ナデによる調整。13世紀中葉のものであろう。114は陶器灯明皿で、底部は平坦で、口縁部は小さく内湾気味に立ち上がる。底部外面下半回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデによる調整で、内外面に鉄釉が掛かる。19世紀前半のものであろう。



註1 出土遺物の編年的位置付けについては、第3章の註1及び以下のものを参考としている。

榑崎彰一 1983「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)』

瀬戸市教育委員会 1990『尾呂』

註2 愛知県埋蔵文化財センター 1991『松崎遺跡』

註3 豊橋市教育委員会他 1996『市道遺跡(Ⅰ)』

第2表 17次調査区出土遺物観察表

遺物NO.	区・遺構	器種・分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整	備考
14-38	B-1 SB-1P1	S 坏身		(1.1)			密	やや不良	淡褐色	内面回転ナデ、高台部貼り付け	
39	B-1 SB-1P1	S 甕		(2.9)			密	良好	灰色	内面擦り消し、外面叩き目	
40	B-1 SB-1P2	S 坏身		(2.2)			密	良好	淡灰白色	内外面回転ナデ	
41	B-1 SB-1P2	S 坏身		(2.3)			密	良好	灰色	内外面回転ナデ	
42	B-1 SB-1P2	S 坏蓋		(1.8)			密	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	
43	B-1 SB-1P2	S 壺		(1.8)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
44	B-1 SB-1P2	他製塩土器		(2.3)			密	良好	淡赤褐色	内外面ナデ・指押さえ	
45	B-1 SB-1P4	S 坏蓋		(1.0)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
46	B-1 SB-1P4	S 壺		(1.1)			密	良好	灰色	内外面回転ナデ	
47	B-1 SB-1P4	H 坏		(1.8)			密	良好	淡灰褐色	内面ヘラミガキ	内外面に赤彩
48	B-1 SB-1P5	S 坏蓋		(1.4)			密	良好	淡灰白色	内外面回転ナデ	
49	B-1 SB-1P5	S 高盤		(2.0)			密	良好	淡灰白色	内外面回転ナデ	
50	B-1 SB-1P5	S 壺		(3.7)	7.4		密	良好	灰色	体部外面回転ヘラケズリ後ナデ	
51	B-1 SB-1P5	H 甕		(2.2)			密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ	
52	B-1 SB-1P6	S 坏身	11.6	(3.4)			密	良好	暗灰色	内外面回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	
53	B-1 SB-1P6	S 坏蓋		(1.0)			密	良好	灰色	内外面回転ナデ	
54	B-1 SB-1P6	S 高盤		(1.6)			密	良好	灰色	内外面回転ナデ	
55	B-1 SB-1P6	H 甕		(1.7)			密	良好	暗茶褐色	口縁部ヨコナデ	
56	B-1 SB-1P7	他製塩土器		(3.6)			密	良好	淡褐色	内外面ナデ・指押さえ	
57	B-1 SB-1P8	S 壺	11.0	(2.8)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
58	B-1 SB-1P9	S 坏身		(2.6)			密	良好	暗灰色	内外面回転ナデ	
59	B-1 SB-1P10	S 坏身		(3.1)			密	良好	灰色	内外面回転ナデ	
60	B-1 SB-1P10	S 坏身		(1.5)	10.2		密	良好	灰色	底部外面回転ヘラケズリ	
61	B-1 SD-1下	S 坏身		(2.2)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
62	B-1 SD-1上	S 坏身		(1.6)			密	良好	灰色	内外面回転ナデ	
63	B-1 SD-1上	S 坏身		(1.1)			密	良好	淡灰色	底部外面回転ヘラケズリ	
64	B-1 SD-1上	S 坏蓋		(2.1)			密	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	
65	B-1 SD-1上	S 坏蓋		(1.1)			密	良好	暗灰色	内外面回転ナデ	
66	B-1 SD-1上	K 碗		(1.2)			密	良好	淡灰色	内面回転ナデ、高台部貼り付け	
67	B-1 SK-1	S 高坏		(2.6)			密	良好	暗灰色	内外面回転ナデ	
68	B-1 SK-1	K 碗		(1.6)			密	良好	淡灰褐色	内面回転ナデ、高台部貼り付け	
69	B-1 SK-1	T 碗	14.3	(6.6)			密	良好	淡黄白色	体部外面下半回転ヘラケズリ	灰釉
70	B-1 SK-1	Z 碗	11.0	(5.0)			密	良好	白色	高台部削り出し	

遺物NO.	区・遺構	器種・分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整	備考
14-71	B-1 SK-1	Z碗	7.2	3.4	6.5		緻密	良好	白色	高台部削り出し	
72	B-1 SK-1	H甕		(3.7)			密	良好	淡茶褐色	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ	
73	B-1 SK-1	他製塩土器		(2.9)			密	良好	赤褐色	内外面ナデ・指押さえ	
74	B-1 SK-1	他焼塩壺	6.2	(4.8)			密	良好	淡褐色	外面ナデ、内面布圧痕?	
75	B-1 SK-1	R砥石	長さ(7.6)	幅2.8	厚さ0.8~1.8	重量61g	石質	凝灰岩			各面に使用痕
76	B-1 SK-3	H甕	21.8	(2.7)		頸部径19.6	密	良好	淡茶褐色	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ	
77	R-1 SK-3	H甕	22.8	(6.0)		頸部径21.8	密	良好	淡褐色	口縁部ヨコナデ、体部内面板ナデ	
78	B-1 SK-10	K広口瓶		(2.1)			密	良好	灰白色	内外面回転ナデ	内外面に灰釉
79	B-1 SK-13	S坏蓋		(1.1)			密	良好	暗灰色	内外面回転ナデ	
80	B-1 SK-13	S壺		(3.4)	10.8		密	良好	灰色	体部外面回転ヘラケズリ、内面回転ナデ	
15-81	B-1 SK-14	T碗		(1.8)	4.1		密	良好	淡白褐色	高台部削り出し	鉄釉
82	B-1 SK-14	T碗		(2.6)	5.2		密	良好	淡黄白色	体部外面回転ヘラケズリ	灰釉
83	B-1 SK-14	T火鉢		(6.8)			密	良好	淡赤褐色	口縁部ヨコナデ、内面ナデ	土師質
84	B-1 SK-14	N鳥伏間瓦					密	良好	灰色	接合面で剥離 家紋「丸に並び鷹の羽」	
85	B-1 SK-18	H鍋		(3.0)			密	良好	赤褐色	口縁部ヨコナデ	
86	B-1 SK-18	D土錘	長さ(2.7)	最大径1.2	重量3.7g		密	やや不良	淡褐色	ナデ・指押さえによる整形	
87	B-1 SK-43	T灯明皿		(1.4)	4.0		密	良好	淡灰色	体部外面回転ヘラケズリ	鉄釉
88	B-1 SK-50	S坏身		(1.7)			密	良好	淡灰色	底部外面ヘラケズリ	
89	B-1 SK-50	H甕		(6.1)			密	良好	淡茶褐色	把手部ナデ・指押さえ	
90	B-1 SK-53	S甕		(2.3)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
91	B-1 SK-53	他製塩土器		(2.1)			密	良好	淡茶褐色	内外面ナデ・指押さえ	
92	B-1 SK-56	K平瓶		(3.9)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
93	B-1 SK-56・P3	S坏身		(3.0)			密	良好	黒灰色	底部外面回転ヘラケズリ	
94	B-1 SK-56・P3	S坏身	12.4	6.3	9.4		密	良好	灰色	内外面回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	
95	B-1 SK-56・P3	H鍋		(5.5)			密	良好	淡灰褐色	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ	伊勢型鍋
96	B-1 SK-60	H甕		(3.3)			密	良好	淡灰褐色	口縁部内面ハケメ、体部内面板ナデ	
97	B-1 SK-60	H鍋		(1.3)			密	良好	淡灰褐色	口縁部ヨコナデ	伊勢型鍋
98	B-1 SK-68	S高坏		(2.7)			密	良好	黒灰色	内外面回転ナデ、外面に波状文	
99	B-1 SK-68	S壺	8.8	(8.3)		最大12.9	緻密	良好	暗灰色	内外面回転ナデ	断面セピア色
100	B-1 SK-68	S坏蓋		(2.4)			密	良好	灰色	内外面回転ナデ	
101	B-1 SK-105	S甕		(7.0)	19.2		密	良好	灰色	体部外面平行タタキ、内面ナデ	
102	B-1 SK-108	K壺		(5.8)	8.2		密	良好	灰褐色	体部外面下半回転ヘラケズリ	
103	B-1 SK-108	S硯	長さ(5.5)	幅(5.7)			密	良好	暗灰色	ヘラケズリ後ナデによる調整	風字硯
104	B-1 SK-111	T碗		(3.4)	5.0		密	良好	淡黄褐色	内外面回転ナデ、高台部削り出し	灰釉
105	B-1 SK-111	Tひょうそく蓋	4.4	1.9			密	良好	淡灰色	内外面ナデ・指押さえ	灰釉
106	B-1 SK-111	Tひょうそく	4.0	(3.4)	4.0		密	良好	淡灰褐色	体部外面ヘラケズリ、底部糸切り	灰釉
107	B-1 SK-111	T甕		(6.4)			密	良好	赤褐色	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	常滑窯産
108	B-1 SK-111	Z碗	9.7	3.1	4.3		密	良好	白色	高台部削り出し	
109	B-1 SK-111	他焼塩蓋	7.0	1.0			やや粗雑	良好	淡赤褐色	内外面ナデ・指押さえ	
110	B-1 SK-111	他焼塩壺	7.0	7.0	4.8		やや粗雑	良好	淡茶褐色	外面ナデ・指押さえ、内面布圧痕?	
111	B-1 表土	H甕		(3.4)			やや粗雑	良好	淡赤褐色	内外面ハケメ	
112	B-1 表土	S陶白		(3.9)	9.6		密	良好	淡灰褐色	内外面回転ナデ、底部未調整	
113	B-1 表土	P碗		(2.3)	7.0		密	良好	灰白色	底部外面糸切り後ナデ、高台部に粉殻痕	
114	B-1 表土	T灯明皿	10.8	1.9	4.6		密	良好	淡黄褐色	体部外面下半回転ヘラケズリ	鉄釉

\* S-須恵器 K-灰釉陶器 P-灰釉系陶器 T-陶器 Z-磁器 H-土師器 R-石製品 D-土製品  
N-瓦 他-製塩土器・焼塩壺等  
法量の単位はcm、( )は残存数値。底径には、脚部径や台部径を含む。



## 第5章 まとめ

### 1. 16次調査区の様相

吉田城址の16次調査では、主に15世紀～16世紀前半を中心とした遺構・遺物が検出されている。これは、城主酒井忠次や池田照（輝）政による吉田城の整備以前の状況と考えられ、市役所新庁舎建設等に伴う9・10次調査において第1期（註1）とした段階に対応しよう。そこでの調査では、一辺30～60m程の方形の区画が6区画確認されており、いずれも幅2～3m、深さ0.4～0.8m程の溝によって仕切られている。そして今回の調査で検出された溝SD-2やSD-3についても、その規模や方向性からこうした区画溝の一部である可能性が考えられよう。

一方で、16世紀後半以降の遺構・遺物はほとんど存在しない。これは吉田城の改修・整備が終わり、この部分が三の丸として本格的に機能していたという理由が考えられよう。その後、三の丸の西端から安政年間（1854～1860）に南端へと移された太鼓櫓（後年の太鼓櫓）は、この調査区に隣接した三の丸門付近に築かれたとされている。しかし、これに関する記録は絵図のみで、その規模や内容については不明である。また、これに関連した遺構も今回の調査では確認できていない。但し、土壌SK-2から出土した軒平瓦・平瓦・丸瓦等については、この太鼓櫓に葺かれていたものである可能性が考えられる。

なお明治時代以降のことではあるが、歩兵第十八聯隊に関連する遺構が確認された。この聯隊は明治19（1886）年に吉田城跡地に設置され、終戦近くまで続いているが、第8図にあるような兵舎等の建物がいくつか建てられた。この図がどの時期に記録されたものかは明らかではないが、調査区の中央でコの字状に検出されたコンクリート基礎は、その位置や規模から配置図に見える「面会所」に当たるものと考えられる。またこの面会所は、図から3間×12間の規模の建物と推測されるが、建物の大きさに比べて基礎はかなりしっかりしている。

### 2. 17次調査区の様相

17次調査区は、吉田城の藩士屋敷地に当たり、天保6（1835）年～嘉永2（1849）年頃作の「吉田藩士屋敷図」では「最勝院」とされているが、これや屋敷に関する遺構等はほとんど検出されていない。なお、調査区の南側で検出された大型の土壌SK-110やSK-111が僅かに江戸時代後期のものであるが、これらが屋敷地に関連するかははっきりしない。

一方、今回の調査で最も注目されるのは、8～10世紀の遺構・遺物が狭い調査区ながらかなりまとまって見つかったことである。この時期の遺構・遺物は、17次に及ぶこれまでの発掘調査でも量の多寡はあるものの各調査区で確認されているが、三の丸の東側から藩士屋敷地にかけての範囲に特に多く検出されていることから、当地付近がその中心地となろう。特に、当調査区では方向性・規則性を有したと考えられる総柱建物SB-1や溝SD-1が検出されていることから、調査地周辺には8世

紀後半～9世紀前半の時期に官衙的な遺跡が存在したことが推測される。

また、天慶3(940)年に伊勢神宮領の「飽海神戸」が当地付近に設置されたと推定されており(註2)、10世紀後半～15世紀の遺構・遺物との関連性が考えられよう。

さらに、明瞭な遺構は確認されていないが、5世紀後半に位置付けられる須恵器が数点ではあるが出土しており、古墳時代における集落あるいは古墳の存在が予想される。これまでの周辺における調査でも古墳時代の遺物がいくつか確認されている。例えば、7次調査では4世紀の銅鏃が出土し、9次調査では5世紀の土師器高坏や円筒埴輪、7世紀の須恵器埴瓶等が出土しており、古墳築造が活発に行われていたことが推測される。

今橋城築城時の様子も記録されている『牛久保密談記』他にある「馬見塚の岡」開削については、『吉田城址(Ⅰ)』(註3)でも述べているように旧地形の平坦な低位段丘を指すのではなく、「古墳」を示している可能性が高い。また、調査地周辺の地形条件の良さを考慮すれば、4世紀から7世紀にかけての継続的な造墓活動が推測されよう。

註1 豊橋市教育委員会他 1994 『吉田城址(Ⅰ)』

註2 豊橋市史編集委員会 1973 『豊橋市史』第1巻

註3 註1に同じ



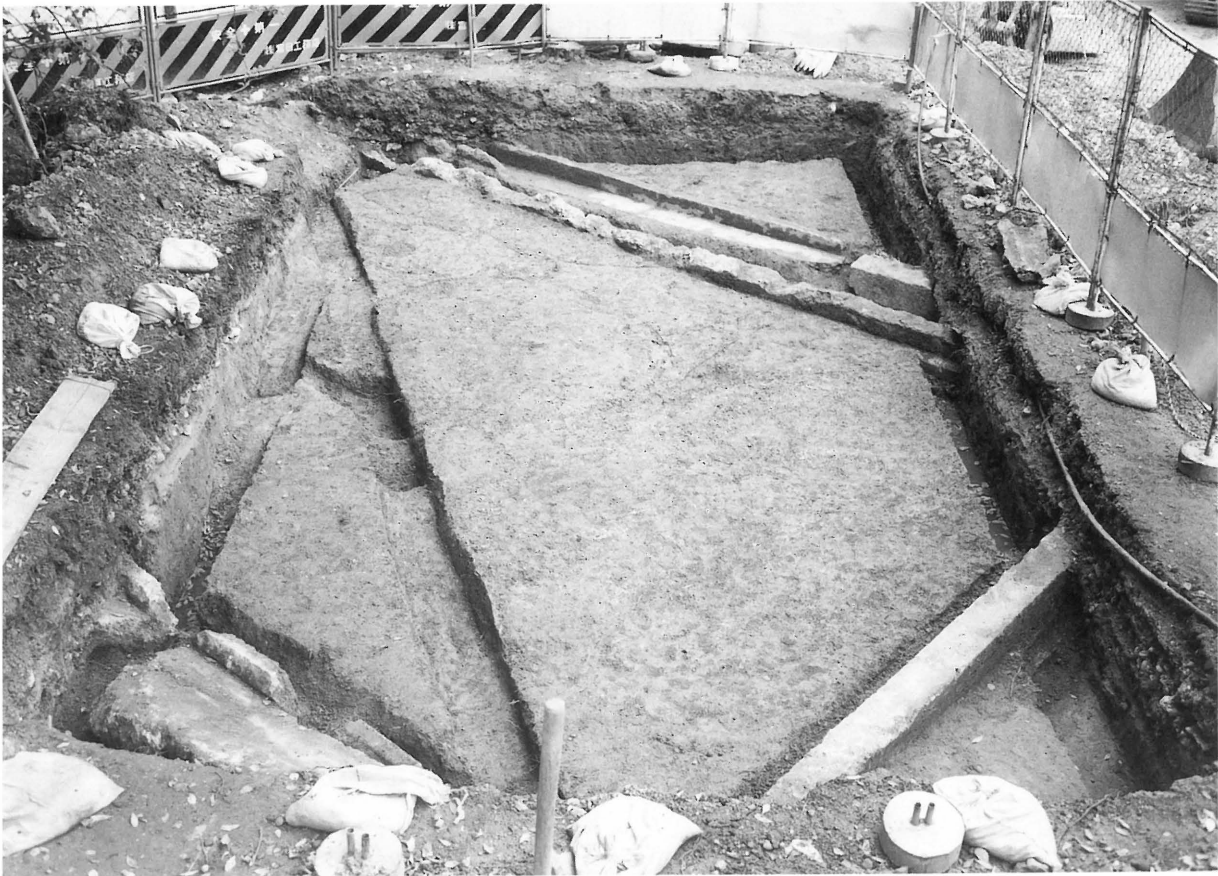
# 報 告 書 抄 録

ふりがな	よしだじょうし							
書名	吉田城址 (Ⅲ)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	豊橋市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第50集							
編著者名	小林 久彦							
編集機関	豊橋市教育委員会・豊橋遺跡調査会							
所在地	〒440-8501 愛知県豊橋市今橋町1番地 TEL 0532-51-2879							
発行年	西暦1999年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よしだじょうし  吉田城址	とよはしいまはしちょう 豊橋市今橋町  いちばんちほか 1番地他	23201	79393	34° 46′ 00″	137° 24′ 00″	19981021～	50m <sup>2</sup>	公園便所
						19981105		改築工事
						19981104～	50m <sup>2</sup>	球場便所
						19981124		改築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
吉田城址	城館・ 集落	平安  中世  近世 近代	総柱建物 溝 溝・土壇  土壇	須恵器・灰釉陶器・ 土師器等 灰釉系陶器・土師器 等 陶磁器・土師器等				

# 写真図版







1. 調査区全景 一上面一 (北東から)



2. 調査区全景 一上面一 (南西から)





1. 調査区全景 一下面一 (南西から)



2. 調査区全景 一下面一 (北西から)



1. SD-1~SD-3  
全景 (西から)



2. SD-3 断面  
(西から)

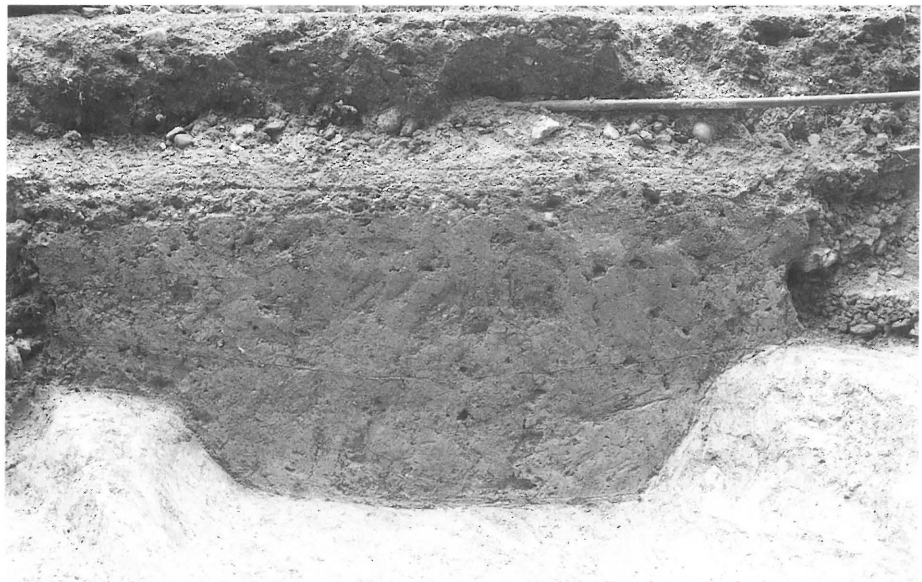




1. SD-3 遺物出土  
状況 (北から)



2. SD-2 遺物出土  
状況 (北から)



3. SD-2 断面  
(南東から)



1. SK-2 他全景 (北西から)



2. 調査区南壁断面 (北東から)





1. 作業風景 (南東から)



1



3



4



7



8



10

2. 出土遺物-1







1. 調査区全景-1 (西から)



2. 調査区全景-2 (西から)



1. SB-1 全景 (北から)



2. SB-1 全景 (西から)

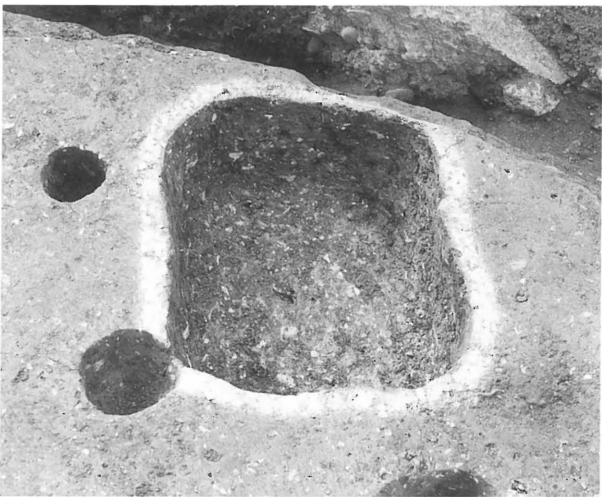




1. SB-1・P5断面 (南から)



3. SB-1・P8断面 (南から)



2. SB-1・P5完掘状況 (東から)



4. SB-1・P6完掘状況 (東から)

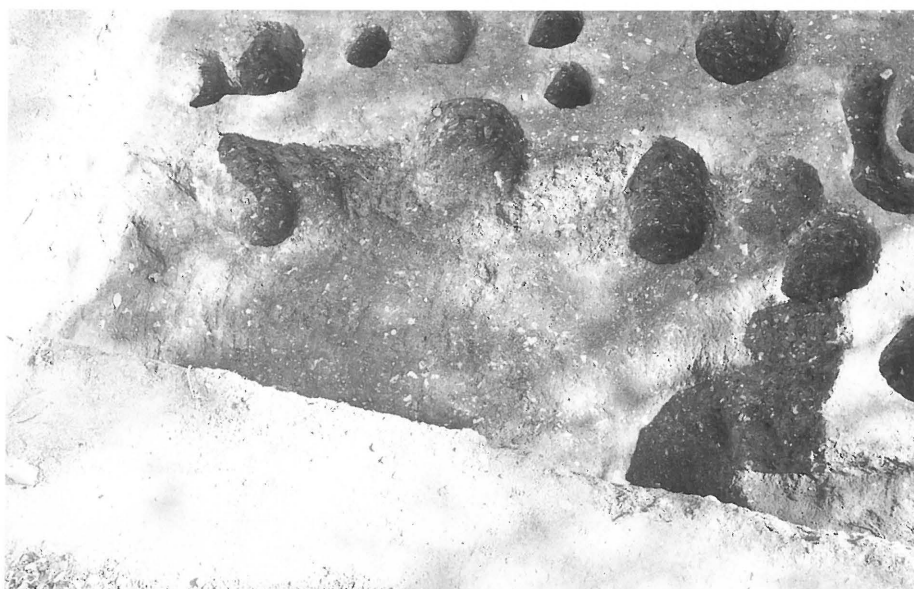


5. SD-1全景 (北から)





1. SD-1断面  
(東から)



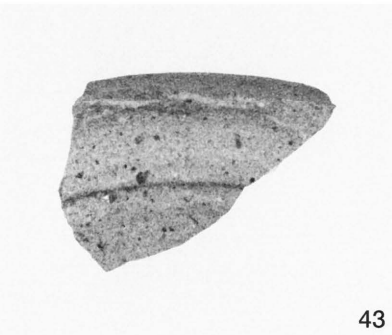
2. SK-1全景  
(西から)



3. SK-14全景  
(東から)



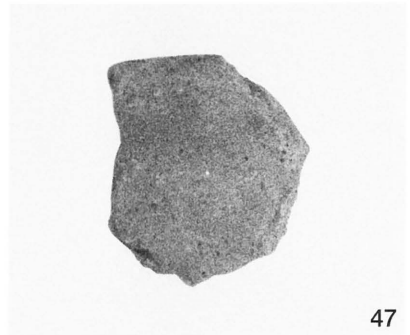
1. 作業風景（南から）



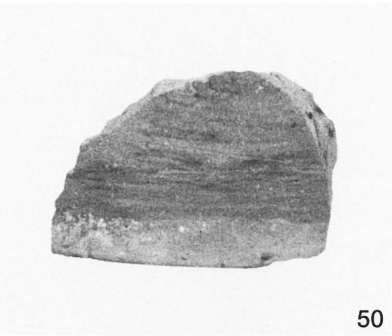
43



44



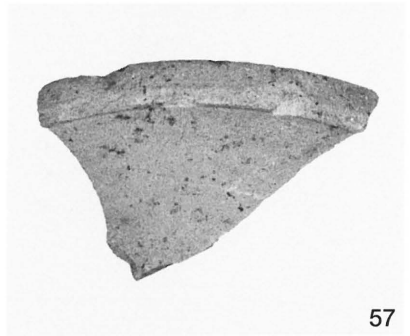
47



50



56



57



67

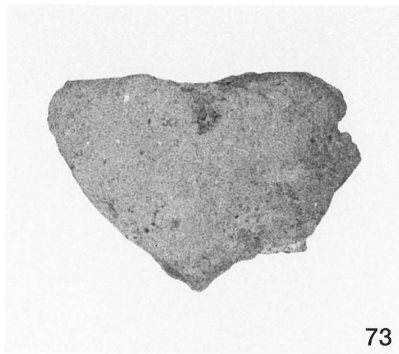


69



70

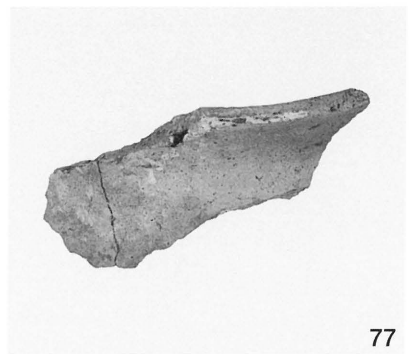
2. 出土遺物-1



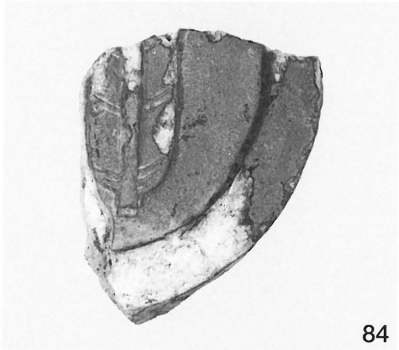
73



75



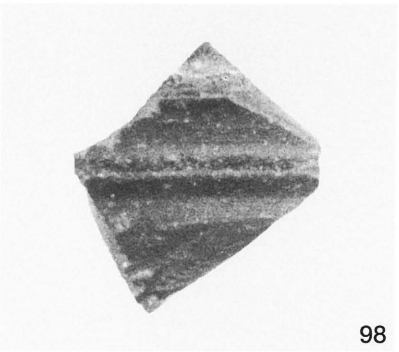
77



84



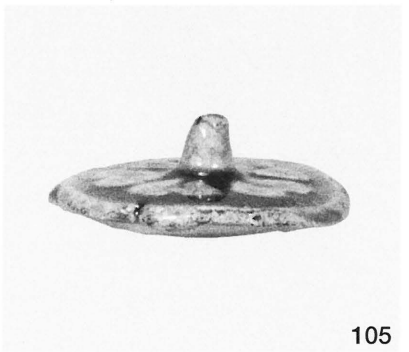
95



98



99



105



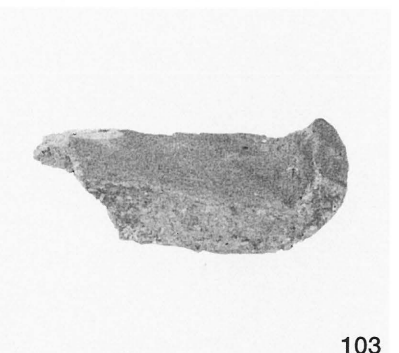
101



102



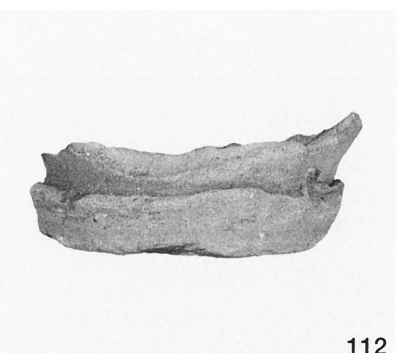
106



103



110



112



豊橋市埋蔵文化財調査報告書第50集

吉田城址（Ⅲ）

1999年3月25日

発行 豊橋市教育委員会©

文化振興課

豊橋遺跡調査会

〒440-8501 豊橋市今橋町1番地

印刷 株式会社豊橋印刷社